

# 手繰ヶ城山古墳

— 測量調査報告書 —

2011年3月

富山大学人文学部考古学研究室





前方部墳頂から後円部を見る(北東から)



前方部北側隅角から後円部を見る(北から)



# 手繰ヶ城山古墳

— 測量調査報告書 —

2011年3月

富山大学人文学部考古学研究室



## 例 言

1. 本書は、富山大学人文学部考古学研究室が、平成 20・21（2008・2009）年度に実施した、福井県永平寺町松岡志比塚・法寺岡地内に所在する国史跡手繰ヶ城山古墳の墳丘測量調査の成果報告である。
2. 測量調査は、永平寺町教育委員会の協力を得て、富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）の構成員が中心となり実施した。
3. 報告書の作成は、4 で記す学生が中心となり調査参加者全員が協力して行った。写真撮影は高橋浩二が行った。
4. 本文の執筆及び製図、写真図版作成は、高橋浩二（富山大学人文学部准教授）、田上和彦、舟崎久雄（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）、今津和也、上原利予、千葉真吾、鵜野千恵美、生方香織、及川実沙子、河合陽介、北村史織、瀨瀬文佳、小浦方志織、東海林心、百瀬香菜子（以上、富山大学人文学部学生）が担当した。
5. 本文内では、基本的に氏名の敬称は省略した。
6. 本書の編集は、高橋浩二が担当した。
7. 調査図面及び写真等は、富山大学人文学部考古学研究室で保管している。
8. 本書の作成にあたっては、河村好光氏、田邊朋宏氏をはじめとする方々からご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
9. 本書は、平成 20～22 年度富山大学人文学部傾斜配分経費（フィールドワーク・実験系補完経費）の活動成果を含むものである。



写真 1 手繰ヶ城山古墳から見た九頭竜川と福井平野



目 次

例 言

第1章 調査経過

- 1 調査に至る経緯……………高橋浩二…………… 1
- 2 調査経過と調査組織……………額額文佳・高橋浩二…………… 4

第2章 手繰ヶ城山古墳の立地と周辺の古墳・遺跡……………生方香織・高橋浩二…………… 7

第3章 研究史

- 1 既往の調査の概要……………田上和彦・高橋浩二……………12
- 2 手繰ヶ城山古墳の編年について……………北村史織・舟崎久雄……………15

第4章 測量調査の成果

- 1 従来の測量図と所見……………高橋浩二……………19
- 2 今回の測量調査の目的と課題……………高橋浩二……………23
- 3 2008年度の測量調査の方法と成果
  - (1) 調査方法 ……………田上和彦……………25
  - (2) 調査成果 ……………今津和也・高橋浩二……………28
    - 後円部墳頂 ……………今津和也・高橋浩二……………29
    - 後円部北西側 ……………上原利予・高橋浩二……………30
    - 後円部北側 ……………上原利予・高橋浩二……………30
    - 後円部西側 ……………上原利予・高橋浩二……………31
    - 後円部南側 ……………今津和也・高橋浩二……………31
    - 造出 ……………千葉真吾・高橋浩二……………34
    - 陪塚 ……………千葉真吾・高橋浩二……………36

4 2009年度の測量調査の方法と成果

- (1) 調査方法 ……………東海林心・田上和彦……………39
- (2) 調査成果 ……………高橋浩二……………41
  - 前方部上面および前方部墳頂 ……………鵜野千恵美・高橋浩二……………41
  - 前方部前面 ……………小浦方志織・高橋浩二……………42
  - 前方部南側隅角 ……………及川実沙子・高橋浩二……………42
  - 前方部南側側面 ……………河合陽介・高橋浩二……………43
  - 南側くびれ部 ……………北村史織・高橋浩二……………44
  - 前方部北側隅角 ……………東海林心・高橋浩二……………45
  - 前方部北側側面 ……………額額文佳・東海林心・百瀬香菜子・高橋浩二……………46
  - 北側くびれ部 ……………百瀬香菜子・高橋浩二……………47

第5章 手繰ヶ城山古墳の評価と意義……………高橋浩二……………49

- 1 手繰ヶ城山古墳の墳丘形態と規模……………49
  - (1) 墳丘形態の解明のための定点 ……………49

(2) 墳丘形態の復元と墳丘の規模	52
2 手繰ヶ城山古墳の築造規格	57
3 手繰ヶ城山古墳の時期と歴史的評価	62
(1) 築造時期の評価	62
(2) 福井平野における大首長墳の出現と手繰ヶ城山古墳	64
抄 録	高橋浩二

## 図 版 目 次

- 図版 1 墳丘測量図 [今津・上原・千葉・鶴野・生方・及川・河合・北村・瀬瀬・小浦方・東海林・百瀬 作成]
- 図版 2 墳丘断面図 [鶴野・河合・北村・瀬瀬・小浦方・東海林 作成]

## 写 真 図 版 目 次

- 巻頭写真図版 1 前方部墳頂から後円部を見る（北東から）  
2 前方部北側隅角から後円部を見る（北から）
- 写真図版 1 1 前方部墳頂から後円部を見る（北東から）  
2 後円部墳頂から前方部を見る（南西から）
- 写真図版 2 1 前方部北側隅角から後円部を見る（北から）  
2 北側くびれ部から前方部側面を見る（南西から）
- 写真図版 3 1 前方部南側隅角から後円部を見る（東から）  
2 前方部南側隅角（西から）  
3 前方部北側隅角（北から）
- 写真図版 4 1 前方部前面墳裾（南東から）  
2 同上（北から）  
3 前方部前面（北西から）
- 写真図版 5 1 後円部墳頂から北西斜面 1 段目平坦面を見る（南東から）  
2 後円部北西斜面 1 段目平坦面（西から）
- 写真図版 6 1 後円部南西斜面（南から）  
2 後円部背面（南東から）
- 写真図版 7 1 南側くびれ部（北から）  
2 後円部から造出（手前）と陪塚を見る（西から）
- 写真図版 8 1 後円部と造出の間の溝（北から）  
2 同上（北東から）  
3 造出と陪塚（左）の間の溝（北西から）



写真図版9	1 造出（東から）
	2 造出から陪塚を見る（西から）
写真図版10	1 後円部墳頂（南東から）
	2 同上（北から）
	3 前方部南側隅角外側の残丘（西から）

## 挿 図 目 次

第1図	手繰ヶ城山古墳の立地と周辺の古墳・遺跡 [生方香織 作成]	9
第2図	測量図の変遷（各報告書から引用）	14
第3図	山本昭治1974の測量図（山本1974）	20
第4図	斎藤優1979の測量図（斎藤1974）	20
第5図	福井大学考古学研究会編1978の測量図（福井大学考古学研究会編1978）	21
第6図	松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会2005の測量図（松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会2005）	22
第7図	測量杭配置図 [東海林心 作成]	26
第8図	調査区分図 [東海林心 作成]	28
第9図	造出測量図・断面図 [千葉真吾・百瀬香菜子 作成]	35
第10図	陪塚測量図・断面図 [千葉真吾・及川実沙子 作成]	37
第11図	墳裾および2段目裾、墳頂平坦面の遺存状況 [高橋浩二・東海林心 作成]	50
第12図	墳裾線の復元ラインと墳丘主軸 [高橋浩二・東海林心 作成]	53
第13図	手繰ヶ城山古墳墳丘復元図 [高橋浩二・東海林心 作成]	54
第14図	前方後円墳の段築成（都出1989）	57
第15図	手繰ヶ城山古墳と佐紀陵山古墳の比較 [高橋浩二・東海林心 作成]	59
第16図	手繰ヶ城山古墳と各古墳との比較 [高橋浩二・東海林心 作成]	60
第17図	各古墳出土の円筒埴輪 [高橋浩二・東海林心 作成]	63

## 表 目 次

第1表	第1次調査の作業日程 [瀬瀬文佳 作成]	4
第2表	第2次調査の作業日程 [瀬瀬文佳 作成]	5
第3表	越前における古墳編年（青木1992）	17
第4表	2008年度測量杭一覧 [東海林心 作成]	27
第5表	2009年度測量杭一覧 [東海林心 作成]	40
第6表	墳丘各部の標高 [高橋浩二 作成]	56
第7表	墳丘各部の傾斜角度 [高橋浩二 作成]	56
第8表	後円部直径とくびれ部幅の比率の比較 [高橋浩二 作成]	58
第9表	福井平野の大首長墳と諸画期 [高橋浩二 作成]	65

# 第1章 調査経過

## 1 調査に至る経緯

福井県最大の河川で、越前・美濃国境の両白山地に源を発する九頭竜川は、大野・勝山の盆地を抜けて、平野に流れ出た後、足羽川、日野川と合流して、日本海に注ぐ。これら九頭竜川や足羽川そして日野川の中・下流域一帯を占める広大な平野が福井平野である。九頭竜川が福井平野へと流れ出た地点の北岸の丘陵上には、北陸最大の約140mの前方後円墳である六呂瀬山1号墳が存在する。そして九頭竜川を挟んだ対岸の丘陵上には、手繰ヶ城山古墳が築かれている。手繰ヶ城山古墳は、六呂瀬山1号墳に次ぐ約130mの規模をもつ2段築成の前方後円墳である。それとともに、広大な福井平野を統括するに至った初代の大王の古墳と考えられている。

手繰ヶ城山古墳は、松岡町（現永平寺町）教育委員会から委託を受けた福井大学考古学研究会の分布調査によって、1971年に発見された<sup>(1)</sup>。1972年から1973年には山本昭治らが測量を行い、翌年にはその概略が報告された<sup>(2)</sup>。その後1974年から1977年にかけて、福井大学考古学研究会による測量調査が実施された<sup>(3)</sup>。後円部墳頂最高所を起点とする相対高によって、50cm間隔の等高線で表現された測量図は、永平寺町史や福井県史<sup>(4)</sup>、前方後円墳集成などに掲載され、現在に至るまで研究の基本となっている。

また、福井大学考古学研究会等が採集し、町教育委員会を中心に保管されている埴輪片に関しては、300点を越える実測図および拓本が報告されている<sup>(5)</sup>。川西宏幸は、手繰ヶ城山古墳の円筒埴輪を、北陸のなかでもっとも古い特徴をそなえているとしてⅡ期と認定した<sup>(6)</sup>。また古川登は、松岡古墳群の他の古墳の円筒埴輪と対比し私案Ⅰ群としたうえで、川西編年Ⅱ期に比定した。それとともに、少数の形象埴輪（家形、蓋形など）の存在を指摘した。さらにその後、4世紀末から5世紀頃の六呂瀬山1号墳出土の埴輪よりも相対的に古いことがわかってきた<sup>(7)</sup>。このように1980年代後半までの調査および研究によって、手繰ヶ城山古墳は、北陸の大型古墳の中ではもっとも古い4世紀後葉から末頃の築造であることが明らかにされていった。

なお手繰ヶ城山古墳は、1977年12月には国史跡に指定されている。1990年から1991年には、後円部墳頂のレーダ探査が実施され、石棺の存在が指摘された<sup>(8)</sup>。また2005年には、町教育委員会から委託を受けた測量会社によって測量調査が行われ、絶対高による25cm間隔の等高線で表現された測量図が報告されている<sup>(9)</sup>。現在に至るまで発掘調査は行われていない。

上記のように手繰ヶ城山古墳は、北陸最大級の前方後円墳であり、かつ北陸において最初に登場した大型古墳である。したがってその年代的な位置付けは、福井平野にその後相次いで築かれた大型前方後円墳の編年や、さらには北陸における前期古墳の編年とも深く関係するものである。手繰ヶ城山古墳は未発掘だが、採集された円筒埴輪片を中心にして、幸いにも築造時期を考えることができる。しかし、埴輪片の点数は多いものの全体像が明らかな円筒埴輪はほとんどなく、近年研究が進展している畿内の円筒埴輪の細分編年<sup>(10)</sup>との対比も十分にはすすんでいない。従来の調査・研究では手繰ヶ城山古墳の築造時期の比定を採集品の円筒埴輪に大きく依存してきたが、墳丘形態など複数の要素をとりあげて検討し、円筒埴輪の編年と合わせて

総合的に時期を絞り込むことが重要である。

墳丘形態に関しては、福井大学考古学研究会の報告<sup>(11)</sup>では、上田説の A 型式 (6 : 2 : 2)、棚説の日葉酢媛陵型に比定されている。しかしながら、手繰ヶ城山古墳は地形的制約と崩落による影響が墳丘各所に認められ、とりわけ後円部の変形は著しい。また同報告では、一見バチ型を呈する前方部に関する重要な指摘がなされている。やや長くなるが引用すると、「あたかもバチ型を呈するようになったのは、後世におけるくずれのせいではなかろうかということである。それは、前方部がバチ型に開く部分がちょうどくずれ部に位置していることや、その基段部においても、何ら変様のない自然地形であることによるのである。この問題は、本墳の年代比定とも関連する重要な要素ではあるが、現在のところとりあえずバチ型として取り扱った」とする。だが、このような重要な認識にもかかわらず、測量図には崩落部が具体的に表現されていないため、崩落部とバチ型の形状との関係は第三者には把握しにくいものとなっている。なお、2005 年の町教育委員会による測量図では、崩落部は表現されているが、墳裾や段築の表現はなされていない。他には、手繰ヶ城山古墳を「前方部の開き方が曲線的で頂上は先端に向けて高くなっている」として、箸墓や西殿塚、渋谷向山、甲斐銚子塚、椿井大塚山の各古墳と同じ I-1 型式に類型化し、相対的に古く位置付ける河村説<sup>(12)</sup>がある。また、手繰ヶ城山古墳には造出状の施設が備わっているが、これと中期古墳から一般的に見られるようになる造出とが如何なる関係をもつのかという問題がある<sup>(13)</sup>。

以上のように手繰ヶ城山古墳の墳丘形態に関しては、墳丘の変形が著しい箇所が見られ、さらには測量図の表現が十分ではないこともあり、研究が進展しているとはあまりいえない状況である。したがって、まずは手繰ヶ城山古墳の測量図をより充実させ、利用しやすくすることが最重要の課題といえるだろう。そしてその上で、墳丘形態のさらなる検討をふまえて、古墳の築造時期を絞り込んでいくことが求められている。

富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）では、「越中・能登における古墳文化形成過程の研究」をテーマとしてかけ、2001～2005 年度には富山県氷見市阿尾島田古墳群の発掘と測量、2006～2007 年度には同市稲積オオヤチ古墳群の測量などの調査を継続的に実施してきた。またこの間、新たに「日本海中部沿岸域における古墳出現過程の新研究」を立ち上げ、2004～2007 年度には科学研究費補助金などを獲得し研究を推進してきた。現在はこれをさらに発展させた、「北陸における古墳の出現と変遷過程に関する研究」をテーマのひとつとしてかけている。

手繰ヶ城山古墳は、北陸最大級の前方後円墳であり、かつ北陸における大型古墳の出現過程を考える上できわめて重要な古墳であるにもかかわらず、先述のように測量図には改良を加えるべき点が見られ、また築造時期に関する検討の余地を多く残している。そこで、考古学研究室では、北陸における古墳の研究をさらに推進するためには手繰ヶ城山古墳が最重要の古墳のひとつと考え、合わせて学生の専門教育を兼ねて、測量調査を計画し、永平寺町教育委員会に打診することになった。調査は永平寺町教育委員会に協力を仰ぎ、考古学研究室が主体となって行った。

(高橋 浩二)

## 注

- (1) 福井大学考古学研究会編 1972 による。
- (2) 山本昭治 1974 による。なお、斎藤 1979 にも測量図が掲載されている。
- (3) 福井大学考古学研究会編 1975・1978 による。
- (4) なお福井県史には、1m 間隔の等高線で表現された測量図が掲載されている（福井県 1986）。
- (5) 古川編 1982、福井大学考古学研究会編 1983 による。
- (6) 川西 1978 による。
- (7) 青木編 1988 による。
- (8) 青木・大塚・中川 1998 による。
- (9) 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005 による。
- (10) 鐘方 2003、一瀬 2005 など。
- (11) 福井大学考古学研究会編 1978 による。
- (12) 河村 2001 による。
- (13) 青木編 1988 では、この造出状の施設は「張り出し」と記述され、隣接する陪塚と合わせて、同様の施設が伴う六呂瀬山 1 号墳・3 号墳との相対的な差が考察されている。しかし、中期古墳に一般的に見られる造出との関係については言及されていない。

## 参考文献

- 青木豊昭・大塚治夫・中川良介 1998 「地中レーダー探査による石棺調査について」『継体大王と越の国』まつおか古代フェスティバル実行委員会編、福井新聞社
- 青木豊昭編 1988 『六呂瀬山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第 4 集、福井県教育委員会
- 一瀬和夫 2005 「円筒埴輪の編年」『大王墓と前方後円墳』吉川弘文館
- 鐘方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第 4 号、埴輪検討会
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号、日本考古学会
- 河村好光 2001 「川田ソウ山 1 号墳をめぐる問題」『石川県鳥屋町川田古墳群』鳥屋町教育委員会
- 斎藤 優 1979 『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会
- 福井県 1986 『福井県史』資料編 13 考古
- 福井大学考古学研究会編 1972 『松岡町古墳分布調査報告書』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1975 『松岡 3 号墳（手繰ヶ城山古墳）の調査』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1978 『手繰ヶ城山古墳（松岡 3 号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会
- 福井大学考古学研究会編 1983 『手繰ヶ城山古墳・石舟山古墳・二本松山古墳の埴輪』（手繰ヶ城山古墳の調査Ⅲ）、松岡町教育委員会
- 古川登編 1982 『松岡古墳群の埴輪』松岡古墳群を守る会
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005 『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成 13 年～平成 15 年度町内遺跡範囲確認調査報告書』
- 山本昭治 1974 「手繰ヶ城山古墳について」『若越郷土研究』第 19 巻 2 号、福井県郷土史懇談会



## 2. 調査経過と調査組織

第1次調査は次のような日程で実施した。対象とする範囲は、後円部と造出、そして陪塚である。まず、2008年7月30日に測量原点を設置した。8月5日には機材を搬入し、古墳の測量作業を開始した。測量は、原点のほかに適宜各所に杭を設置しながらすすめた。8月23日には古墳の写真撮影を行った。同日、対象とする範囲の調査が終了した。なお、調査は以下のような組織を編成して実施した。調査後は、調査担当者および参加者を中心にして報告書の作成を行った。

調査にあたっては、永平寺町教育委員会、また宿舍の借用にあたって便宜をはかっていただいた諏訪間区長の竹澤清隆氏、ならびに地区の皆様、多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。  
(額額文佳・高橋浩二)

### 手繰ヶ城山古墳第1次調査組織

調査日程：2008（平成20）年7月30日～8月23日

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：黒崎 直（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋浩二（富山大学人文学部准教授）

調査参加者：高橋彰則、田上和彦（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）

坂田裕之、佐藤雄太、高畑郁美、細丸善弘、増永佑介、村上直、横幕真、今津和也、上原利予、千葉真吾、鶴野千恵美、生方香織、及川実沙子、河合陽介、北村史織、額額文佳、小浦方志織、東海林心、百瀬香菜子

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：浅野良治（永平寺町教育委員会）

第1表 第1次調査の作業日程

	7/30	31	8/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
杭設定	■																								
測量調査																									
その他							宿舍整備・機材搬入												休日						写真撮影・機材搬出・宿舍撤収

第2次調査は次のような日程で実施した。対象は、第1次調査で未実施の、前方部とくびれ部を中心とする範囲である。まず、2009年8月3日に古墳上の下草の伐採をはじめた。それとともに、測量原点の設置を開始した。8月5日には機材を搬入した。古墳の測量は8月6日から本格的に開始した。測量は、原点のほかに適宜各所に杭を設置しながらすすめた。その後、8月22日には古墳の写真撮影を行った。同日、対象とする範囲の調査が終了した。なお、調査は以下のような組織を編成して実施した。調査後は、調査担当者および参加者を中心にして報告書の作成を行った。

調査にあたっては、永平寺町教育委員会、また宿舍の借用にあたって便宜をはかっていただいた諏訪間区長の坪川金次氏、ならびに地区の皆様、多大なご協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。  
(額額文佳・高橋浩二)

### 手繰ヶ城山古墳第2次調査組織

調査日程：2009（平成21）年8月3日～8月22日

調査主体：富山大学人文学部考古学研究室（歴史文化コース考古学教育研究分野）

調査代表者：黒崎 直（富山大学人文学部教授）

調査担当者：高橋浩二（富山大学人文学部准教授）

調査参加者：田上和彦、舟崎久雄（以上、富山大学大学院人文科学研究科学生）

今津和也、千葉真吾、鶴野千恵美、生方香織、及川実沙子、河合陽介、北村史織、額額文佳、小浦方志織、東海林心、百瀬香菜子、井澤昇、井上恭一、岩崎俊樹、北島裕子、塩澤恭輔、瀬原史織、宮嶋厚平

（以上、富山大学人文学部考古学研究室学生）

調査協力者：浅野良治、横幕真（以上、永平寺町教育委員会）

第2表 第2次調査の作業日程

	8/3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
杭設定																					
除草作業																					
測量調査																					
その他				宿舍整備・機材搬入				雨天作業中止					休日								写真撮影・機材搬出・宿舍撤収



写真2 第1次調査参加者



写真3 第2次調査参加者

## 第2章 手繰ヶ城山古墳の立地と周辺の高墳・遺跡

手繰ヶ城山古墳は、福井平野の北東部にある永平寺町から松岡町（現永平寺町）にかけて所在する。福井平野<sup>(1)</sup>は、現在の行政区分で福井市、永平寺町、坂井市、あわら市の範囲にまたがる広大な平野である。北は加越丘陵によって加賀との国境をなす。南は南越盆地（鯖江・武生盆地）へ続いていく。東は、美濃と国境をなす両白山地に源を発する九頭竜川沿いに大野・勝山の小規模な盆地が見られる程度である。そして、平野の西は、日本海となる。

この福井平野の中央部を東から北へ、九頭竜川が貫流している。手繰ヶ城山古墳は、九頭竜川が平野へと流れ出た地点の南岸の丘陵上に立地する。ここからは、福井平野の北部を一望にすることができるとともに、約 18 km離れた日本海の海岸線を臨むことができる。手繰ヶ城山古墳が所在する丘陵一帯には、石舟山古墳や鳥越山古墳、二本松山古墳、泰遠寺山古墳などの重要な古墳が多く築かれ、松岡古墳群を形成する。九頭竜川を挟んだ対岸の丘陵上には、六呂瀬山古墳群が形成され、ここに六呂瀬山 1 号墳と六呂瀬山 3 号墳が存在している。

次に、永平寺町とその周辺地域における、弥生時代後期から古墳時代にかけての主要な遺跡ならびに発掘調査が実施された遺跡について概略する。

### 集落遺跡

福井市林・藤島遺跡（泉田地区）では、弥生後期を中心とする時期の竪穴住居跡 35 棟と平地住居跡 9 棟、掘立柱建物跡 24 棟などが検出されている。ここからは、多数の緑色凝灰岩の管玉や未成品、原石、剥片類の他、翡翠や瑪瑙などの勾玉と未成品類が出土している。また、玉作に伴う鉄製工具が多数検出された。工人集団の居住域と推定される。永平寺町室遺跡は、弥生後期から古墳出現期の集落であり、発掘調査によって竪穴住居跡 12 棟と掘立柱建物跡 3 棟、また断面 V 字状を呈する環濠が検出されている。隣接する同町葵遺跡は古墳出現期の集落であり、掘立柱建物跡 10 棟などが検出されている。ここからは在地型式の土器とともに、S 字状口縁台付甕や庄内式土器が出土したとされ<sup>(2)</sup>、注目される。福井市林遺跡は、1960（昭和 35）年の発掘調査の結果、出土した弥生後期から古墳前期の土器が林 I～III 式に編年され、当時の北陸地方における土器編年の標式遺跡として有名である。

弥生後期から終末期、さらには古墳前期初頭にかけての集落の発掘例は増えているが、松岡古墳群と重複する時期の集落としては、林遺跡の調査が行われているだけである。

### 弥生墳墓および古墳

弥生後期から終末期の墳墓としては、まず福井市原目山墳墓群が挙げられる。原目山 3 号丘と名付けられた地区からは、一辺約 10m の方形周溝墓 3 基と無区画の土壇墓約 6 基が検出され、このうち 1 号方形周溝墓 3 号埋葬と 3 号方形周溝墓主体部、それに 2 基の土壇墓から鉄刀各 1 点が出土している。原目山 2 号墓は、一辺約 30m の方形台状墓である。墳頂部からは 5 基の埋葬施設が検出されており、素環頭鉄刀 1 点と鉄刀 2 点、鉄剣 1 点、鉄槍 1 点、鉄鉈 1 点、鉄鏃 2 点、銅鏃 1 点、ガラス小玉 49 点が出土している。原目山 1 号墓は、一辺約 20m の方形



台状墓である。墳頂中央部には埋葬施設が単独で存在し、ここから鉄刀 2 点、管玉 323 点とガラス小玉 728 点が出土している。これらの墓は、有力集団による墓域（3 号丘）から、特定家族墓（2 号墓）の段階を経て、特定個人墓（1 号墓）が抜け出していく過程を示す例として評価されている<sup>(3)</sup>。

後続する墓には、永平寺町乃木山墳墓がある。乃木山墳墓は、丘陵上に単独で築かれた、約 34×24m の長方形を呈する台状墓である。墳頂部から 3 基の埋葬施設が検出されている。中央の 1 号埋葬は、とりわけ大型の墓壙（約 7.2×4.5m）をもち、その内部に木槨（約 4.7×1.6m）を構築して、箱形木棺（約 3.0×0.7m）を据え置く構造である。ここからは素環頭鉄剣と鉄刀が各 1 点出土している。鉄刀（長さ約 1.1m）は素環頭鉄刀の環頭部を切落とした可能性が高いものとされる<sup>(4)</sup>。他には木製枕が検出されている。2 号埋葬からは、鉄刀 4 点（うち 1 点は素環頭部を切断し木製把を付け直したもの）と鉄鉋 1 点が出土している。乃木山墳墓は、規模や立地などからみて、原目山 1 号・2 号墓よりも、さらに隔絶化がすすんだ例と評価できる。

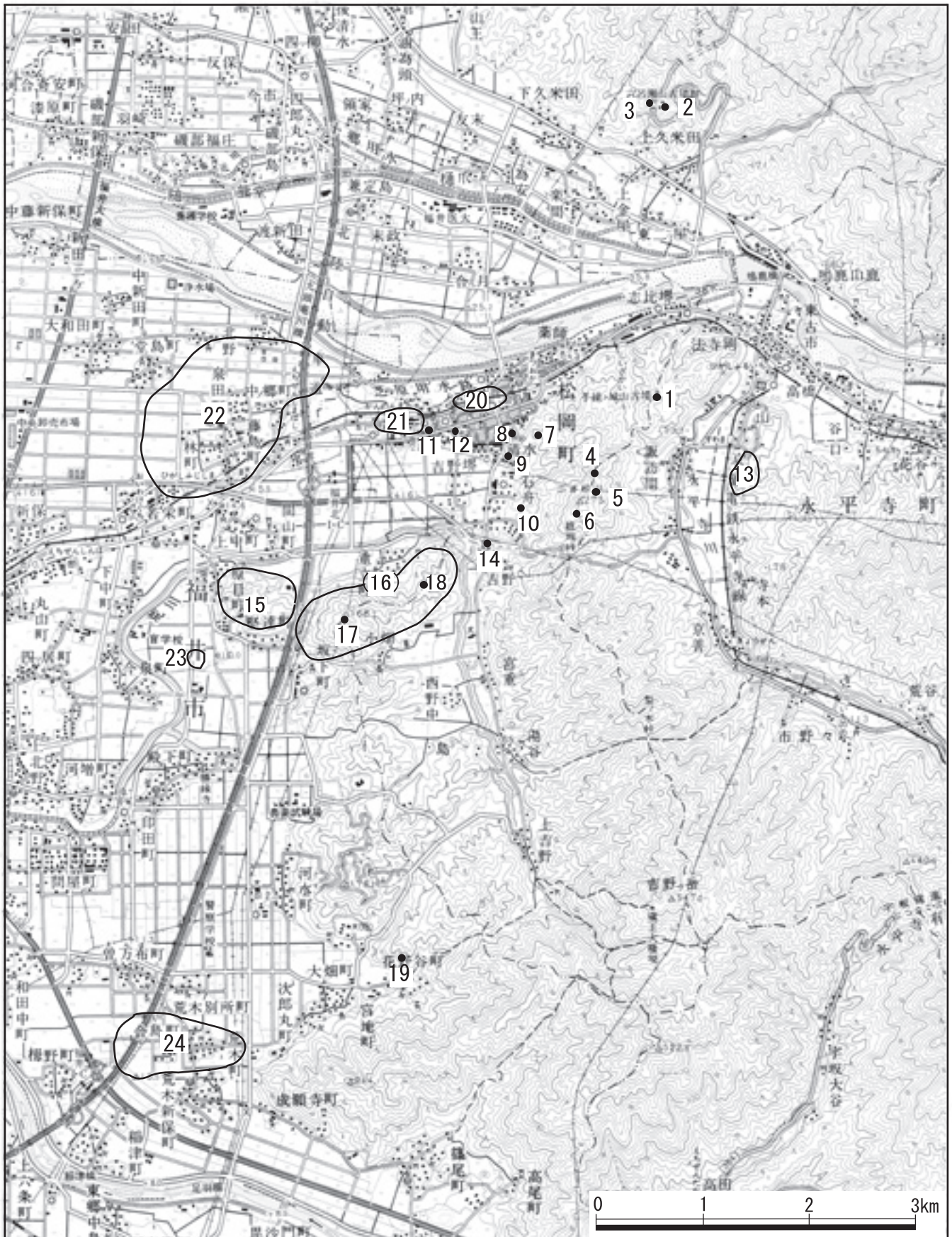
このほか、永平寺町南春日山墳墓群では、規模約 45m の四隅突出墓ないし方形台状墓と推定される弥生終末期頃の墓が発掘されている。袖高林古墳群（墳墓群）では、弥生後期から終末期の方形台状墓 4 基が発掘され、鉄刀 1 点が出土している。

初現期の古墳には、福井市花野谷 1 号墳がある。円墳ないし短小な前方部が付く、約 23m の前方後円墳と推定されている。墳頂部には 2 基の埋葬施設が存在し、中央の第 1 埋葬からは三角縁神獣鏡および連弧文銘帯鏡各 1 面、鉄槍および鉄剣各 1 点、鉄鏃 3 点、鉄鉋および鉄刀子各 1 点、そして翡翠勾玉 1 点、碧玉管玉 26 点、ガラス小玉 145 点が出土している。なお、近接する箇所には、古墳中期の帆立貝形前方後円墳とされる規模約 16m の 2 号墳があり、鏡や盾、槍のほか、滑石小玉 1 万点以上が出土している。

坂井市六呂瀬山 1 号墳は、標高 196m の丘陵頂部に築かれた、北陸最大の約 140m の前方後円墳である。2 段築成で、葺石および埴輪を備える。石棺片が出土しており、後円部埋葬施設は舟形石棺の直葬と推定されている。後円部には、造出状の張出が見られ、さらにその先端には約 16m の陪塚と考えられる方墳が存在する。円筒埴輪は川西編年Ⅱ期のものである。1 号墳のすぐ西側には、約 85m の前方後円墳である六呂瀬山 3 号墳が築かれている。同じく 2 段築成で、葺石および埴輪を備える。後円部には、造出状の張出があり、さらに陪塚と推定される方形の高まりが隣接して見られる。円筒埴輪は川西編年Ⅲ期のものである。

続いて、松岡古墳群内の前方後円墳は、手繰ヶ城山をはじめ鳥越山、石舟山、二本松山の各古墳はいずれも標高 140m を越える松岡丘陵の高所にあるが、泰遠寺山と稲荷山の 2 古墳は九頭竜川沿いの河岸段丘の端部に立地する。泰遠寺山古墳は、1932・1933（昭和 7・8）年頃変電所の建設に伴い、未調査のまま破壊・削平された。その後の研究で約 100m の前方後円墳として復元されてきたが、1992（平成 4）年に実施された発掘によって、約 64m の帆立貝形前方後円墳であることが明らかにされた。周濠と葺石、埴輪を備える。後円部であったと思われる箇所からは、過去に舟形石棺が出土した。現存する棺身部分のみが、現在春日山公園内に移設されている。松岡発見として伝えられる、半円方形帯神獣鏡および内行花文鏡各 1 面、翡翠勾玉 2 点、ガラス勾玉 2 点、碧玉質勾玉 1 点、碧玉質管玉 8 点、ガラス棗玉 2 点、ガラス蜻蛉玉 2 点、ガラス丸玉 9 点、ガラス小玉 448 点の一括品が、泰遠寺山古墳の副葬品として比定さ





1. 手繰ヶ城山古墳 2. 六呂瀬山1号墳 3. 六呂瀬山3号墳 4. 石舟山古墳 5. 鳥越山古墳 6. 二本松山古墳  
 7. 乃木山古墳 8. 春日山古墳 9. 南春日山墳墓群 10. 檜ノ木坂古墳 11. 泰遠寺山古墳 12. 稻荷山古墳  
 13. 袖高林古墳群 14. 吉野八幡神社古墳 15. 原目山古墳群 16. 重立山古墳群 17. 三角山古墳  
 18. 重立山16号墳 19. 花野谷古墳 20. 葵遺跡 21. 室遺跡 22. 林・藤遺跡 23. 原目遺跡 24. 荒木遺跡

第1図 手繰ヶ城山古墳の立地と周辺の古墳・遺跡



れている。円筒埴輪は川西編年Ⅳ期のものである。泰遠寺山古墳の南東 250m の位置には、約 50m の前方後円墳と推定され、葺石と埴輪を備える稲荷山古墳がかつて存在したが、現在は失われている。

丘陵部の前方後円墳では、手繰ヶ城山古墳の後やや時期をおいて次に編年されるのが、鳥越山古墳である。鳥越山古墳は、標高 264m のところに築かれた、約 53.7m の帆立貝形前方後円墳である。埴輪を備えるが、段築や葺石は存在しない。2001（平成 13）年に発掘調査が実施され、後円部の中心部から直葬の舟形石棺と、やや東へ寄った位置から竪穴系横口式石室が確認された。後円部墳頂からは、石釧 1 点と鉄製 f 字形鏡板付轡 1 点、土師器、須恵器（ON46 型式）が出土しており、これらは中心埋葬に後続する竪穴系横口式石室に伴う遺物と推定されている。円筒埴輪は川西編年Ⅳ期のものである。

石舟山古墳は、標高 257m のところに築かれた、約 79.1m の前方後円墳である。2 段築成で、埴輪を備える。前方部の先端には約 13m の方墳が存在し、陪塚と考えられている。1972（昭和 47）年に実施された後円部埋葬施設の発掘では、直葬の舟形石棺が検出されたが、盗掘を受け、棺身のみが遺存する状況であった。甲冑片 1 点と須恵器 3 片（TK208 型式<sup>5)</sup>）が採集されている。また、2002・2003（平成 14・15）年の発掘では、三角板革綴の甲冑に使われた三角形地板片や引合板片、裾板ないし押付板片、籠手の部品と推定される小札片と篠状鉄板片の他、鉄刀茎片や須恵器片などが出土した。円筒埴輪は川西編年Ⅳ期のものである。

二本松山古墳は、標高 273m の丘陵最高所に築かれた、約 89m の前方後円墳である。2 段築成で、埴輪を備える。東側のくびれ部には造出が存在し、さらにその先端には陪塚と考えられる墳丘が築かれている。後円部から、過去に 2 基の直葬の石棺が発見されている。1 号石棺は享保年間に盗掘を受け、1880（明治 13）年に再発掘された際、人骨、朱、勾玉 1 点、甲冑などが出土している。2 号石棺は 1906（明治 39）年に三角点設置に伴い発掘が実施され、仿製四獣鏡 1 面、金銅製冠 2 点、小札鋌留眉庇付冑および三角板鋌留短甲各 1 点、頸甲 1 点、脇当 1 点、鉄刀 2 点、鉄剣 1 点、碧玉管玉 4 点が出土した。また、須恵器片（TK23 型式）が採集されている。円筒埴輪は川西編年Ⅳ期のものである。

松岡古墳群内ではこの他にも、檜ノ木坂 5 号や吉野八幡神社、春日山などの重要な古墳が発掘されている。これらはいずれも丘陵西麓に存在する。檜ノ木坂 5 号墳は、標高 72m の地点に築かれた約 28m の円墳で、埴輪を備える。墳頂部の 2 基の割竹形木棺から、鉄剣 2 点、鉄刀 1 点が出土している。吉野八幡神社古墳は、標高 40m の地点に築かれた約 20m の円墳で、埴輪を備える。粘土槨の箱形木棺内から、鉄矛 1 点、鉄刀 8 点、鉄鏃 9 点、鉄鋤鋤先 3 点、鉄鎌 3 点、鉄刀子 2 点、鉄鉈 3 点、鉄鑿 2 点が出土している。春日山古墳は、標高 64m の地点に築かれた約 20m の円墳である。両袖式の横穴石室内に横口式舟形石棺を内蔵するが、盗掘を受けている。鉄矛・鉄刀各 1 点、鉄地金銅張鏡板付轡 1 点、杏葉、兵庫鎖、鞍片、鈴片 1 点、ガラス切子玉・小玉、平玉、雲母片、土師器、須恵器などが出土している。檜ノ木坂 5 号墳と吉野八幡神社古墳は中期前葉に、春日山古墳は後期後葉頃に比定される。

他には、原目町の丘陵上に、2 基の前方後円墳を含む重立山古墳群がある。発掘された古墳のうち、1～4 号墳は約 12～24m のいずれも中期後半頃の円墳である。1 号墳からは獣形鏡 1 面、鉄剣、鉄鏃約 10 点、鉄刀子・鉄斧・鉄鉈・砥石各 1 点、勾玉 3 点、管玉 7 点、扁平玉 1

点、そして2号墳からは鉄剣・鉄槍・鉄斧各1点、3号墳からは鉄剣2点と鉄刀子1点が出土している。前方後円墳の重立山16号墳(約42m)と三角山古墳(約55m)は未発掘である。さらに南側の丘陵には、やはり未発掘の前方後円墳である坂下古墳(約49m)が存在する。

このように、永平寺町周辺には重要な遺跡・古墳が数多く確認、発掘されている。古墳時代の集落は現時点ではあまり調査の進展がみられないが、弥生後期・終末期には多数の遺跡・墳墓が形成され、勢力基盤の安定が推察される場所である。とりわけ、手繰ヶ城山と六呂瀬山1号、六呂瀬山3号、石舟山、二本松山の各古墳は、80～140m級の前方後円墳であり、各種の外部施設を備える。中心主体には舟形石棺が採用、または石棺の存在が推定される。これに、やや規模が小さな前方後円墳だが、複数の外部施設を備え、同じく舟形石棺を中心主体とする泰遠寺山古墳と鳥越山古墳を加えた7基が、4世紀から6世紀に相次いで築かれた点は注目される。広大な福井平野を見渡すことができる点は、さることながら、九頭竜川の平野への注ぎ口部に位置するという地理的条件が勢力基盤の発展、継続の要因の一つとして挙げられる。また、九頭竜川を介せば、日本海へ容易に移動できることが深く関係するものと推測される。

(生方香織・高橋浩二)

## 注

- (1) 福井平野は、中央部を流れる九頭竜川を境にして、北側の坂井平野と南側の狭義の福井平野にさらに分けられる。
- (2) 青木豊昭 1993 による。
- (3) 甘粕 1974、大塚 1986 による。
- (4) 村上 2000 による。
- (5) 石舟山古墳および二本松山古墳で採集された須恵器片の編年観は、中司 1993 による。

## 参考文献

- 青木豊昭 1993 「古墳は語る」『福井県史』通史編1 原始・古代、福井県  
甘粕 健 1974 「古墳の出現と統一国家の形成」『図説日本の歴史』1 日本のあけぼの、集英社  
大塚初重 1986 「原目山墳墓群」『福井県史』資料編13 考古本文編、福井県  
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会  
田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店  
中司照世 1993 「日本海中部の古墳文化」『新版 古代の日本』第7巻中部、角川書店  
福井県 1986 『福井県史』資料編13 考古  
福井県教育庁埋蔵文化財センター1999 『袖高林古墳群—中部縦貫自動車道および364号道路改良工事に伴う調査—』  
福井県教育庁埋蔵文化財センター2009 『林・藤島遺跡 泉田地区』  
福井県教育委員会 1988 『六呂瀬山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第4集  
福井市 1990 『福井市史』資料編1 考古  
福井市教育委員会 2001 『花野谷1号墳発掘調査概報』  
藤井利章 1990 「林遺跡」『福井市史』資料編1 考古、福井市  
まつおか古代フェスティバル実行委員会 1997 『発掘された北陸の古墳報告会資料集』  
斎藤 優 1979 『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会  
松岡町教育委員会 1984 『泰遠寺山古墳』  
松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005 『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書』  
村上恭通 2000 「鉄器生産・流通と社会変革—古墳時代の開始をめぐる諸前提—」『古墳時代像を見直す—成立過程と社会変革—』青木書店



## 第3章 研究史

### 1 既往の調査の概要

手繰ヶ城山古墳は、松岡町（現永平寺町）教育委員会から委託を受けた福井大学考古学研究会の分布調査によって、1971年に発見された。当初は周辺の古墳とともに通番で、松岡3号墳と呼称された。隣接する陪塚は、松岡4号墳と呼ばれている。

この成果は1972年に『松岡町古墳分布調査報告書』として公表され、古墳は全長128.4m、後円部径78.0m、くびれ部幅40.5m、前方部長50.4m、前方部前面幅56.5mの規模を有する北陸最大級の前方後円墳であることが明らかとなった。また墳形の保存状態は良好であり、墳丘全面に葺石が認められること、円筒埴輪片が多数採集されること、2段築成であることなどが合わせて報告されている。この調査以降、手繰ヶ城山古墳は注目されるようになった。

翌1972年12月から1973年1月にかけて、斎藤優・山本昭治の両氏によって墳丘測量が行われ、その成果は山本氏によって『若越郷土研究』に「手繰ヶ城山古墳について」の題目で報告されている。管見の限り、手繰ヶ城山古墳の名称はこの頃から使われはじめたのではないかと思われる。山本氏は墳丘測量図を示し、前方後円墳であるか前方後方墳であるかの判断は困難であるとしている。また、2段築成であることを指摘し、年代は立地の観点から二本松山古墳より下降するものと捉えた。他には、陪塚と考えられる方墳が2基連続すると述べている。

2年後の1974年には、杉植林事業が手繰ヶ城山古墳一帯に進められる危険性が生じ、緊急に史跡指定の方向で県・町・地主の三者が協力することとなった。松岡町教育委員会は、史跡指定の申請書に必要な墳丘測量図および資料提供を福井大学考古学研究会に依頼した。この成果は1975年に『松岡3号墳（手繰ヶ城山古墳）の調査』として報告書が刊行された。ただし、時間的な制約もあり、測量調査は松岡町側のみの部分的な測量にとどまった。

1975年には、永平寺・松岡町は墳丘の現状保護という立場から、「手繰ヶ城山古墳の利用計画」案を提出し、それによって国の史跡指定のための「実測による指定地の確認」が必要になった。そこで1976年、再び福井大学考古学研究会に墳丘の全体測量を依頼した。測量調査は同年9月から開始し、1977年秋には全体測量を完了した。この調査により、等高線間隔50cmによる測量図が完成され、1978年には『手繰ヶ城山古墳（松岡3号墳）の調査Ⅱ』が刊行された。調査の結果、測量による規模は、墳長128.5m、後円部径80.3m、同高さ16.0～17.5m、くびれ部幅46.8m、同高さ14.5～18.0m、前方部長48.2m、同幅63.1m、同高さ10.4mという計測値が得られた。前方後円墳のくびれ部片側に隣接して、造出（張り出し）が付設され、さらに1基の陪塚を伴うことが明らかにされた。考察では、古墳の築造規格が検討され、墳長が129.8mになる案と140mになる案が提示された。後者の場合は、後円部が丘陵崖まではみ出してしまうため、墳丘規格をそのまま適合させるのは困難と言える。また、前方後方墳の可能性が検討された。この調査は後に、『六呂瀬山古墳群』や『福井県史』、『前方後円墳集成』に墳丘測量図が掲載されるなど、学術的に大きな意義をもつこととなった。

1979年には、斎藤優によって『改訂松岡古墳群』が刊行され、次節で紹介するような編年的な位置づけが述べられた。それとともに、福井平野を支配し、さらには北陸一円にも影響を及

ぼした三国国造の初代の首長の古墳であることが推測された。

1982年には『松岡古墳群の埴輪』、1983年には『手繰ヶ城山古墳・石舟山古墳・二本松山古墳の埴輪（手繰ヶ城山古墳の調査Ⅲ）』が刊行され、今までに採集された円筒埴輪や少数の器財埴輪の破片が報告された。

1990年9月から1991年3月にかけて、新たな調査方法の導入として地中レーダ探査が石棺調査の方法として有効かどうかを試すことを目的に、手繰ヶ城山古墳をはじめとした松岡古墳群内の前方後円墳に対して、地中レーダ探査が行われた。その結果、手繰ヶ城山古墳の後円部墳頂において、石棺の存在が確認された。石棺蓋の横断面は半円形を呈し、かつ縦断面は頂部が直線を呈するという探査結果から、越前における石棺の編年では最古級に位置付けられる4世紀後半頃の牛ヶ島古墳石棺に類似するものであろうということが青木豊昭らによって推測された。地中レーダ探査から、手繰ヶ城山古墳の一側面を捉えることができた調査である。

2001年からは、3ヵ年事業として松岡町教育委員会による大型前方後円墳の調査が開始された。これは松岡古墳群内の他の古墳に対する国史跡化を視野に入れた計画で、すでに国史跡の指定を受けている手繰ヶ城山古墳については、等高線間隔25cmの測量図が作成されることになった。手繰ヶ城山古墳の測量調査は2002年度に行われ、全長129m、後円部径78m、後円部高18.5m、前方部長51m、前方部幅55m、前方部高11m、くびれ部幅42.5mの前方後円墳であることが報告されている。

このように、1971年以後、数回にわたって調査が実施されている。しかしながら、現在に至るまで発掘調査は行われていない。（田上和彦・高橋浩二）

## 参考文献

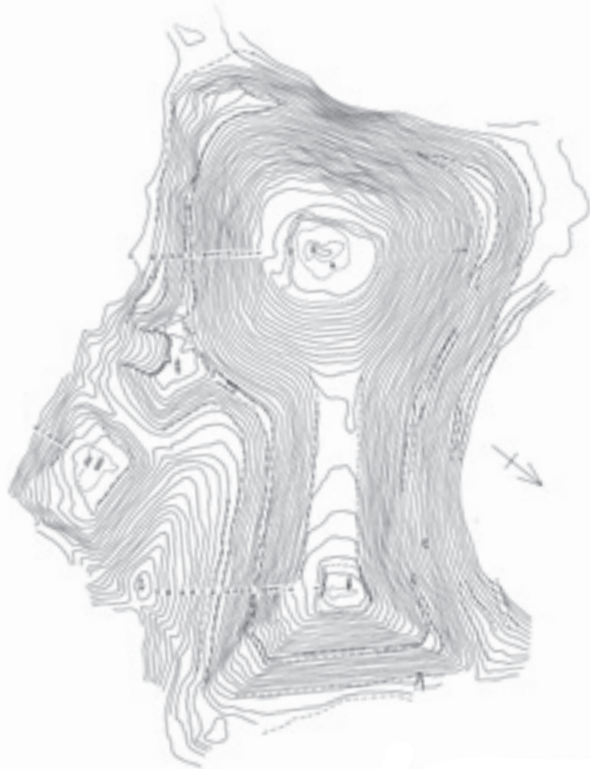
- 青木豊昭編 1980『六呂瀬山古墳群』福井県教育委員会
- 青木豊昭・大塚治夫・中川良介 1998「地中レーダー探査による石棺調査について」『継体大王と越の国』まつおか古代フェスティバル実行委員会編、福井新聞社
- 斎藤 優 1979『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会
- 福井県 1986『福井県史』資料編13 考古
- 福井大学考古学研究会編 1972『松岡町古墳分布調査報告書』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1975『松岡3号墳（手繰ヶ城山古墳）の調査』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1978『手繰ヶ城山古墳（松岡3号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会
- 福井大学考古学研究会編 1983『手繰ヶ城山古墳・石舟山古墳・二本松山古墳の埴輪』（手繰ヶ城山古墳の調査Ⅲ）、松岡町教育委員会
- 古川登編 1982『松岡古墳群の埴輪』松岡古墳群を守る会
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書』
- 山本昭治 1974「手繰ヶ城山古墳について」『若越郷土研究』第19巻2号、福井県郷土史懇談会



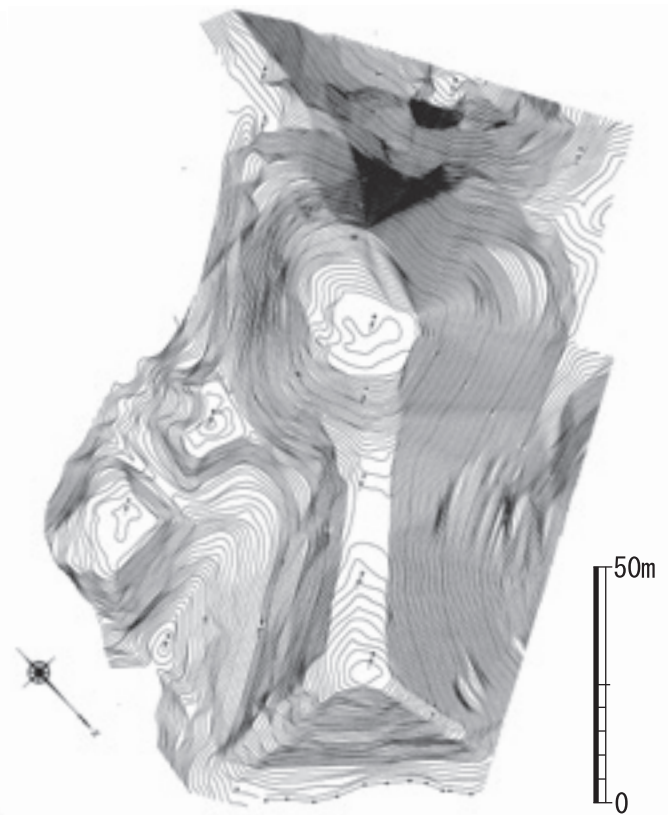
山本 1974



斎藤 1979



福井大学考古学研究会編 1978



松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005

第 2 図 測量図の変遷 (縮尺 1/1600)

## 2 手繰ヶ城山古墳の編年について

福井県内には約 4000 基の古墳の存在が確認されている。そのうち越前のものが約 3000 基を占め、このうち前方後円墳は 81 基の存在が確認されている。

越前の古墳は、いくつかの古墳群に分けられるが、九頭竜川が平野部に流れ込む福井平野東端の背後の丘陵には、北陸でも屈指の大型古墳を含む古墳群が位置する。九頭竜川北岸の丘陵には、北陸最大の六呂瀬山 1 号墳を含む丸岡古墳群が、南岸には手繰ヶ城山古墳を含む松岡古墳群が、相對峙するかのよう位置している。

手繰ヶ城山古墳は福井大学考古学研究会の分布調査により発見された（福井大学考古学研究会編 1972）。このころ松岡 3 号墳とも称され、手繰城山古墳とも表記されていたが（福井大学考古学研究会編 1975）、その後、現在の手繰ヶ城山古墳の呼称と表記となっている。1977（昭和 52）年に国指定史跡となった。

測量調査の成果を踏まえ、福井大学考古学研究会 1978 では、上田宏範氏の墳丘比率（上田 1972）、梶国男氏の墳丘比率（梶 1975）をそれぞれあてはめ、手繰ヶ城山古墳を 4 世紀末ないし 5 世紀初頭の築造であるとした。また、後円部が整った円形をしていない点から、前方後方墳である可能性も示唆された（福井大学考古学研究会編 1978）。

中司照世は、手繰ヶ城山古墳の築造年代を 4 世紀末～5 世紀初頭とした。また、六呂瀬山 1 号墳と手繰ヶ城山古墳に類似性がみられることから、これら 2 基の古墳の被葬者が基本的には松岡古墳群に示される地域集団に属しながらも、より広域の複数の地域集団を統合した首長であったとした。そして 2 基の比較から、手繰ヶ城山古墳のほうが相対的に古いものであるとした（中司 1975）。さらに氏は、越前の古墳を概観し、免鳥長山古墳を除く越前の大首長墳の編年を行った。ここで、手繰ヶ城山古墳は初代の大首長墓とし、4 世紀中葉の築造とした（中司 1990）。また、隔絶した規模と、越前では類例の少ない外部施設を完備し、畿内の大型墳と同様な整備された墳丘であることなどから、手繰ヶ城山古墳の被葬者が畿内の大首長と同盟関係にあった可能性を指摘した（中司 1997）。

川西宏幸は、円筒埴輪を対象に編年を行い、地域の特色の抽出を行った。その中で、手繰ヶ城山古墳の円筒埴輪は北陸のなかで最も古い特徴を備えているとし、編年のⅡ期に比定した。また、畿内の同じ時期の円筒埴輪と近い特徴をもつことを指摘した（川西 1978）。

斎藤優は、松岡古墳群においては手繰ヶ城山古墳、石舟山古墳、二本松山古墳、泰遠寺山古墳、六呂瀬山 1・3 号墳が首長墳であると推測した。そして、主体部の構造と副葬品が明確な二本松山古墳（5 世紀中葉）を基準として、手繰ヶ城山古墳は 4 世紀半ばに遡るものと推定した（斎藤 1979）。

青木豊昭は、上田説の墳丘比率に手繰ヶ城山古墳をあてはめると、箸墓古墳、東殿塚古墳、松岳山古墳などと同じ墳丘比率を示すことを指摘している。また氏は、手繰ヶ城山古墳の造出と陪塚の形態や位置、そして葺石を有する点に着目し、そのあり方は越前の大首長墳の特徴であるとした。このことを踏まえ、手繰ヶ城山古墳と六呂瀬山 1・3 号墳を比較し、手繰ヶ城山古墳が相対的に古いものであることを明らかにした。この造出と陪塚に関しては、その形態と位置から、4 世紀末に比定される神戸市五色塚古墳の周溝に存在する北東マウンド、東マウンドにそれぞれ対応する可能性を指摘した。また、採取された壺形埴輪の口縁端部が内側につま



み上げられ、断面が三角形を呈することから、北陸の古墳前期前半の土器型式である古府クルビ式に並行することを指摘している（青木 1980）。後に氏は、『前方後円墳集成』において、手繰ヶ城山古墳を共通編年の 3 期に位置付けた（青木 1992）。

古川登は、手繰ヶ城山古墳で採集された埴輪片の特徴から、川西編年のⅡ期に比定されるとした。また、壺形埴輪が北陸における土師式土器の編年（吉岡 1967）のⅡ様式に相当することを指摘した。さらに氏は、松岡古墳群の埴輪の分析から、北陸の埴輪の編年を行った。それによると、川西編年Ⅱ期は古川編年Ⅰa期とⅠb期に分けられ、手繰ヶ城山古墳の埴輪をⅠa期に比定した（古川 1982）。

水野和雄は、手繰ヶ城山古墳で採集された円筒埴輪が黒斑を有するという特徴から、4世紀後半に編年されるものとし、手繰ヶ城山古墳は4世紀末～5世紀初頭に築造されたと考えた（水野 1984）。

河村好光は、大型前方後円墳の墳丘企画を論じる際に、前半期前方後円墳（前・中期古墳）をⅠ型式（3段重ね前方後円墳成立前）、Ⅱ型式（3段重ね前方後円墳成立期）、Ⅲ型式（3段重ね前方後円墳整備）の3つの型式に分類した（河村 1997）。さらに、Ⅰ型式を3つに細分し、手繰ヶ城山古墳をⅠ-1型式に分類した。Ⅰ-1型式の古墳としては、箸墓古墳、西殿塚古墳、行燈山古墳、甲斐銚子塚古墳、椿井大塚山古墳、石川県志賀町徳田1号墳などが挙げられている（河村 2001）。

古川と御嶽貞義は、越前を北部と南部に大別し、さらにそれぞれを政治的単位地域に細分し、首長墳の動向を考察した。手繰ヶ城山古墳は松岡地域の地域首長墳であると同時に、越前の広域首長墳であるとして、大賀克彦による時期区分（大賀 2002）の前Ⅵ期（4世紀中頃）の築造であるとした（古川・御嶽 2002）。

松井政信は、後円部と前方部の長幅の比率を中心に、越前の大型古墳の墳丘企画の比較を行った。そして、手繰ヶ城山古墳と六呂瀬山1号墳は極めて近い墳丘企画で築造されたことを指摘し、手繰ヶ城山古墳の築造年代を4世紀中葉であるとした（松井 2005）。

以上のように、墳丘比率の観点からは箸墓古墳などの古墳時代前期の古墳との類似性が示され、円筒埴輪については川西編年Ⅱ期に比定されている。当初、手繰ヶ城山古墳の築造年代は4世紀末～5世紀初頭もしくは4世紀後半に位置付けられていたが、近年では前方後円墳の築造時期が遡って考えられるようになったため、手繰ヶ城山古墳の築造年代も4世紀中葉に遡って考えられる傾向にある。

また、越前の古墳文化の特徴として、福井市足羽山産の笏谷石（凝灰岩）製の刳抜式石棺が指摘されており、この越前における初現は手繰ヶ城山古墳とされている。手繰ヶ城山古墳は発掘調査が行われていないが、地中レーダ探査による調査によれば割竹形石棺をもつことが推測されている（青木・大塚・中川 1998）。

福井平野に分布する石棺は表面の加工痕などの特徴から、Ⅰ～Ⅳ期に分けることができる。さらにⅢ期は排水後孔の位置や、孔に続く溝である排水溝の有無から3つに細分できる可能性がある。また、各首長が同じ笏谷石製の刳抜式石棺を共有するという現象からみて、福井平野を中心とした連合体が形成されていたと考えられる。歴代の首長墳は、松岡古墳群から丸岡古墳群、川西古墳群、松岡古墳群、金津古墳群と変遷している。これらのことは、首長の統括し

地域 通年	既設部		坂井郡			丸岡郡			松岡		足羽郡		福井県			丹生郡			今立郡			大野郡
	敦賀	高岡	川西	高岡	津	丸岡	松岡	足羽	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	福井	
1期																						
2期																						
3期	明神山1号 ●47				城ヶ岳 ●34 瓜生北1号 ●36																	
4期	立園2号 ○22-23				三宅1号 ●38 瓜生北2号 ●38 瓜生北3号 ●44 瓜生北4号 ●30																	
5期	明神山3号 ○35				中山1号 ●44 瓜生北1号 ●35 瓜生北2号 ●44 瓜生北3号 ●30 瓜生北4号 ●30																	
6期																						
7期	向山2号 ○36																					
8期	向山1号 ○40																					
9期	明神山8号 ●39																					
10期	向山3号 ○																					

●前方後円墳 ■前方後方墳 ○円墳

第3表 越前における古墳編年（青木1992）

た範囲が広範囲であったことを示していると考えられている（中司 1997）。

また、松岡古墳群の手繰ヶ城山古墳、六呂瀬山 1 号墳は全長 100m 以上、六呂瀬山 3 号墳は全長約 85m という他と隔絶した規模と傑出した外部施設を有しており、畿内の大王陵との共通点が多く見られる。また、造出や陪塚の位置関係にも共通性が認められる。このことから、これら 3 基は畿内勢力との結びつきの強い、福井平野各地の地域連合体を統括した早い時期の 3 代にわたる大首長墳と考えられている。（北村史織・舟崎久雄）

## 参考文献

- 青木豊昭 1980 「六呂瀬山古墳群の位置づけ—越前における大首長墓について—」『六呂瀬山古墳群』福井県教育委員会
- 青木豊昭 1992 「越前」『前方後円墳集成』中部編、山川出版社
- 青木豊昭・大塚治夫・中川良介 1998 「地中レーダー探査による石棺調査について」『継体大王と越の国』まっおか古代フェスティバル実行委員会編、福井新聞社
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第 2 号、日本考古学会
- 河村好光 1997 「秋常山 1 号墳をめぐる問題」『加賀能美古墳群』寺井町教育委員会
- 河村好光 2001 「川田古墳群の検討」『石川県鳥屋町 川田古墳群』鳥屋町教育委員会
- 齋藤 優 1979 『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会
- 中司照世 1975 「六呂瀬山古墳とその陪塚」『若越郷土研究』第 20 巻 6 号、福井県郷土誌懇談会
- 中司照世 1990 「北陸」『古墳時代の研究』第 11 巻地域の古墳Ⅱ東日本、雄山閣出版
- 中司照世 1993 「日本海中部の古墳文化」『新版 古代の日本』第 7 巻中部、角川書店
- 中司照世 1997 「古墳時代の社会」『福井市史 通史編 古代中世』福井市
- 福井大学考古学研究会編 1972 『松岡町古墳分布調査報告書』松岡町教育委員会
- 福井大学考古学研究会編 1978 『手繰ヶ城山古墳（松岡 3 号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会
- 水野和雄 1984 『松岡古墳群—文化財学習用パンフレット—』松岡古墳群を守る会
- 古川登編 1982 『松岡古墳群の埴輪』松岡古墳群を守る会
- 古川登・御嶽貞義 2002 「越前地方における古墳時代—首長墓古墳の動向を中心に—」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
- 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005 『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成 13 年～平成 15 年度町内遺跡範囲確認調査報告書』
- 吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」『考古学ジャーナル』No.6、ニュー・サイエンス社

## 第4章 測量調査の成果

### 1. 従来の測量図と所見

手繰ヶ城山古墳は、北、北西、南西、東へ派生する4つの小尾根が集まる丘陵頂部に築かれた、2段築成で葺石と埴輪をもつ、墳長約130mの前方後円墳である。未発掘だが、これまでに3回程度の測量調査が実施されている。公表された測量図は、福井大学考古学研究会による測量調査を分岐点にして、次のような3種類（段階）に大別される。

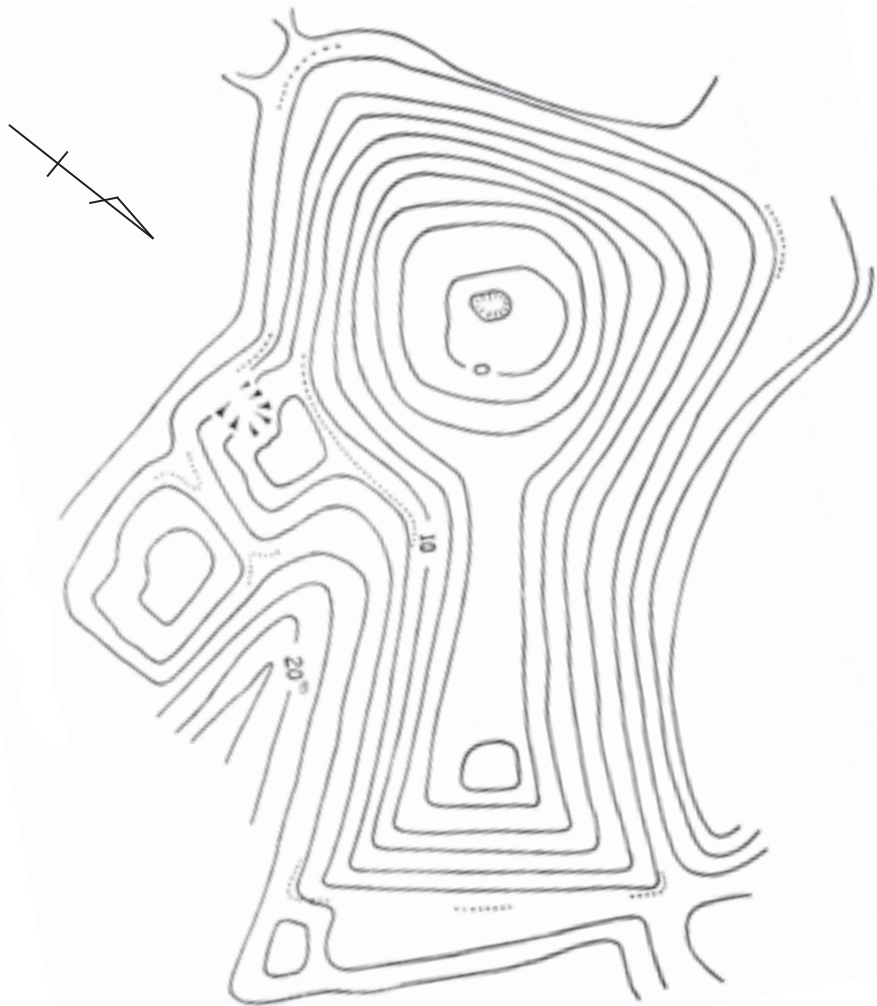
1つ目は、山本昭治らが1972年から1973年に測量を行い、翌年にはその概略が報告されたものである（山本1974）。この測量図は、後円部墳頂を起点とする相対高によって、2m間隔の等高線で描かれている。埴裾や段築は点線で表現されているが、ごく一部に限られる。また、墳丘斜面の崩落や崖面は、この段階ではほとんど表現されていない。氏自身、文中で「はたして前方後円墳であるか、前方後方墳であるかの判断は困難」と述べているとおり、2m間隔の等高線では、古墳の全体像の把握は困難な段階であった。

斎藤優著『改訂松岡古墳群』には、これと類似した測量図が載せられている<sup>(1)</sup>（斎藤1979）。これは斎藤・山本の両氏による平板測量図であり、等高線の様相や測量範囲がほぼ一致することなどから、おそらく山本氏による報告をさらに詳細にしたものと考えられる。後円部墳頂を起点とする相対高によって、1m間隔の等高線で描かれている。埴裾や段築は点線で、より詳しく広い範囲に表現されている。だが、墳丘斜面の崩落や崖面は依然としてほとんど表現されていない。等高線がより詳しくなった結果、後円部墳頂がほぼ方形を呈すること、後円部背面のラインが一直線で、かつ両端に角をもつことなどが指摘され、これによって前方後円墳の可能性が懸念されつつも、前方後方墳とする結論が導かれた。前方後方墳という結論は、手繰ヶ城山古墳の編年的な位置づけにも強く影響したのではないかと思われる。

2つ目は、福井大学考古学研究会による平板測量図である（福井大学考古学研究会編1978）。等高線は、後円部墳頂最高所を起点とする相対高によって、50cmの間隔で描かれている。また埴裾や段築に加え、これらに付随する平坦面、墳頂平坦面などが点線で表現されている。新たに墳丘主軸上の縦断面図が加えられた。これによって、墳丘各部の形状や規模、墳丘構造がさらに具体的に把握できるようになった。後円部は、平野に面する北西側は歪ながら円形を呈するのに対し、反対の南東側は直線的になる。くびれ部から前方部にかけては、平野側はわずかに屈曲してやや弧を描きながらつながるのに対し、反対側は明瞭に屈曲して前方部へ直線的に開いていく。このように墳丘は、平野側と反対側とで、主軸をはさみ非対称をなすことが測量図の形で具体的に示されたのもこの段階からである。また、平野側は反対側と比べて埴裾が標高の低い位置を巡っており、したがって全体的に平野に面する側が高いつくりとなっていることが再認識された。このほか、後世の影響を受けて、前方部隅角の稜線が平坦化していることも気付かれるようになった。

さて、第1章第1節（2頁）でも述べたとおり、斜面の崩落による影響が懸念されながらも、前方部はバチ型の形態をもつことが指摘された。前方部の北側側面から隅角にかけてバチ型に開いていく形状は、50cm間隔の等高線により詳細に表現されるようになり、編年を考える際に

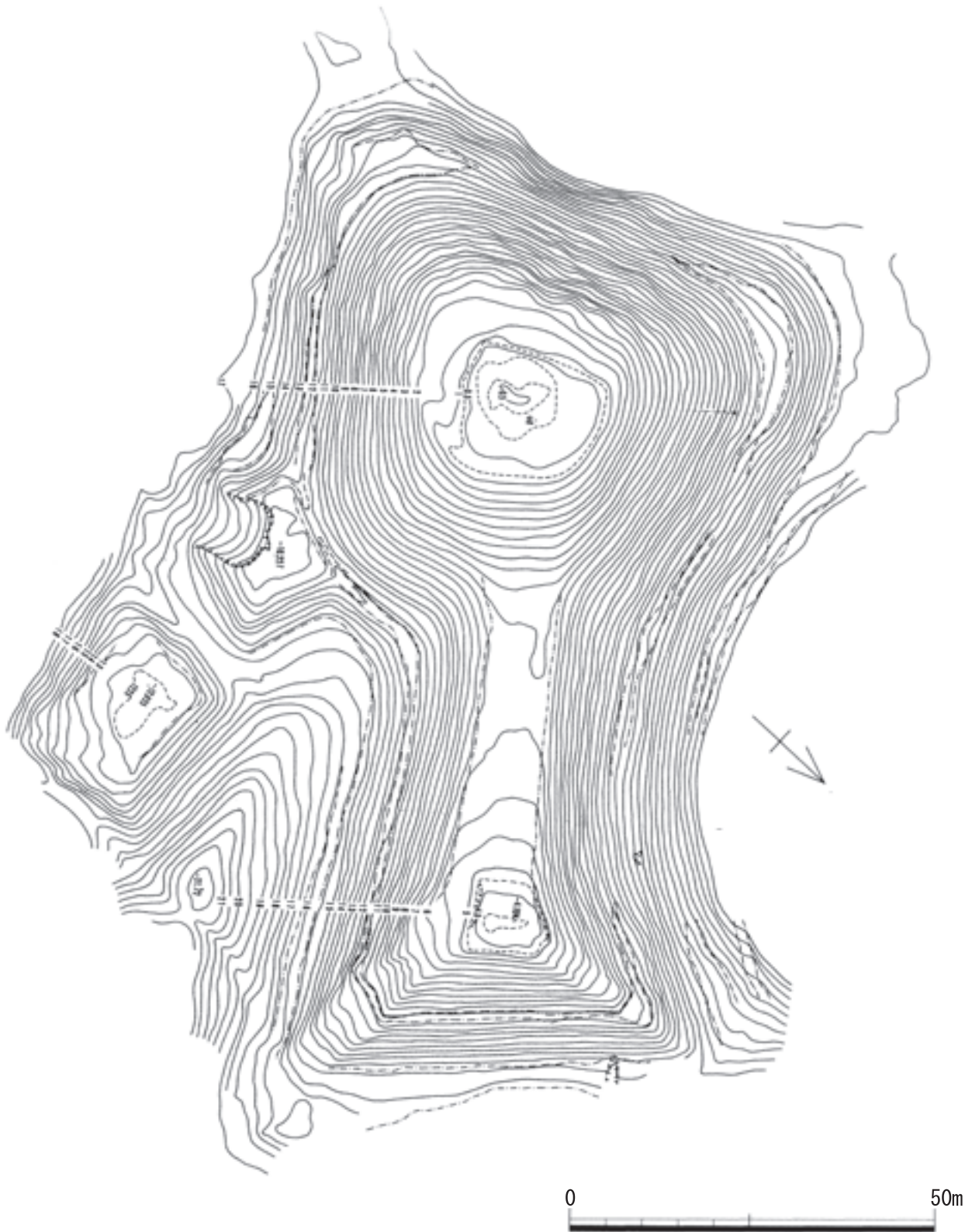




第3図 山本昭治 1974 の測量図 (縮尺 1/1200)

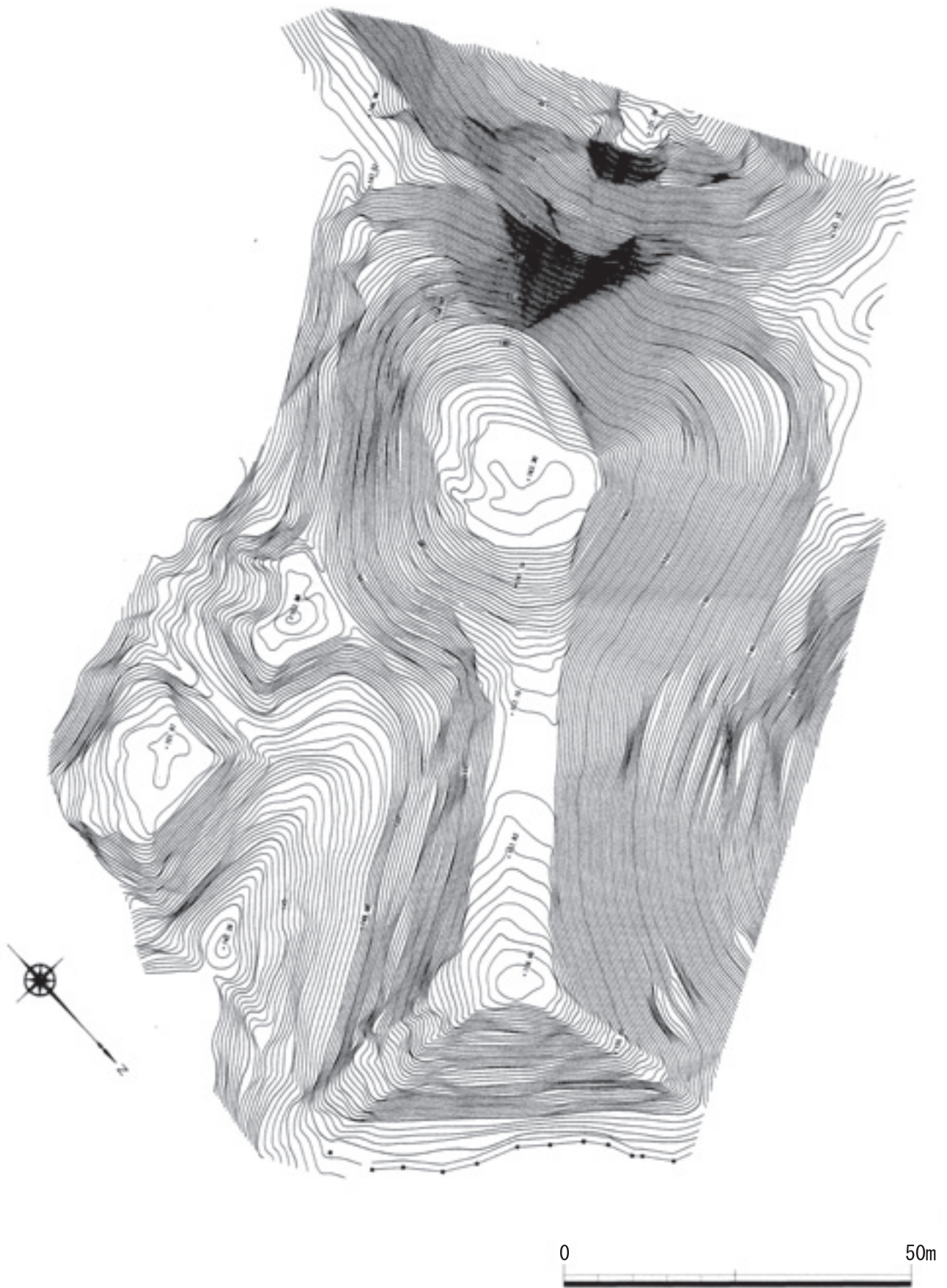


第4図 斎藤優 1979 の測量図 (縮尺 1/1200)



第 5 図 福井大学考古学研究会編 1978 の測量図 (縮尺 1/800)





第 6 図 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005 の測量図（縮尺 1/800）

は少なからず影響することがあったのではないかと思われる。ところが、墳丘斜面の崩落部や山道等による削平箇所は、等高線の密集具合や乱れ、また墳裾線や平坦面を表す線の途切れによって表現されるだけで、その形状や範囲は測量図には具体的に示されていない。そのため、墳丘の変形が後世の影響によるものなのか、それとも築造当初の姿を反映するものなのか、検証しにくい測量図とも言える。

なお、六呂瀬山古墳群（青木編 1980）や福井県史<sup>(2)</sup>（福井県 1986）、前方後円墳集成（近藤編 1992）などには、この測量図が掲載されており、現在に至るまでの基本となっている。これらの報告を通じて、1990年代までには前方後円墳であることが広く認識されていった。

3つ目は、松岡町（現永平寺町）教育委員会が測量会社に委託して行った、光波測距機による測量図である。等高線は絶対高によって、25 cm間隔で描かれている（松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005）。福井大学考古学研究会の図と比較して、後円部背面および平野側下方の崖面までの、より広い範囲が図化されており、古墳の立地状況などが理解できるように改良されている。それとともに、等高線の間隔が狭められたことで、墳裾の構造や墳丘斜面の傾斜、また周辺地形と、後世の改変や崩落による等高線の乱れなどが、より微細に表現されるようになった。しかし、等高線の描写は機械的な印象の強いものである。また、墳裾や段築、これらに付随する平坦面、墳頂平坦面、そして後円部中央の陥没痕等の表現がなく、墳丘の構造や特徴、後円部墳頂面や墳裾など墳丘各部の遺存状況が把握しにくいなどの問題がある。

## 2. 今回の測量調査の目的と課題

以上のように、手繰ヶ城山古墳は、九頭竜川や福井平野、坂井平野側からの眺望を意識しながら、丘陵頂部の地形を最大限に利用して築かれている。墳丘の平面形は、主軸をはさんで非対称で、とりわけ後円部の変形が顕著である。また、墳裾は同一の標高で全周していない。墳丘とその周囲には、斜面の自然崩落や山道等による削平が随所に見られ、また山城としての利用が指摘（山本 1974、河原ほか編 1980）されており、これらのことが墳丘形態の理解を一段と難しくさせている。

これらのことを踏まえ、測量調査は、次のような具体的な目的と課題を設定して行った。

① 古墳とその周囲の広い範囲を、縮尺 1/100、絶対高による 25 cm間隔の等高線で平板測量し、合わせて斜面の崩落や山道等による削平箇所を確認しながら、墳裾や段築、これらに伴う平坦面、墳頂平坦面などの具体的な位置や遺存状況が表現された測量図を作成する。

② 測量図をもとに、墳丘各部の具体的な規模や構造を再検討する。それとともに、古墳の築造規格を考える。また、造出や陪塚の築造過程を考える。

③ 築造規格を比較検討するとともに、円筒埴輪の編年と対比しながら、古墳の築造時期を再検討する。

（高橋 浩二）

## 注

(1) 報告書の発行は 1979 年 7 月で、次の福井大学考古学研究会による測量図の公表（1978 年 12 月）の半年後だが、測量図の表現からみて、これよりも前の段階のものとして位置づけられる。

(2) 福井県史に掲載のものは、等高線が 1m 間隔に再編集されている。



## 参考文献

- 青木豊昭編 1980『六呂瀬山古墳群』福井県教育委員会  
河原純之ほか編 1980『日本城郭大系』第11巻京都・滋賀・福井、新人物往来社  
近藤義郎編 1992『前方後円墳集成』中部編、山川出版社  
斎藤 優 1979『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会  
福井県 1986『福井県史』資料編13 考古  
福井大学考古学研究会編 1978『手繰ヶ城山古墳（松岡3号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会  
松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成13年～平成15年度町内遺跡範囲確認調査報告書』  
山本昭治 1974「手繰ヶ城山古墳について」『若越郷土研究』第19巻2号、福井県郷土史懇談会



写真 4～9 測量および室内作業、ミーティング風景

### 3. 2008年度の測量調査の方法と成果

#### (1) 調査方法

**基準点の設置(第7図)** 測量原点は、松岡町・永平寺町教育委員会による2006(平成18)年度松岡古墳群測量図作成業務の際に設置された、杭T4-15およびT4-16、TB-3とした。杭T4-15は後円部墳頂平坦面の北西端、杭T4-16は前方部北側隅角の外側、杭TB-3は後円部北西側1段目平坦面に、それぞれ位置する。そして、世界測地系に基づくこれら3つの杭を原点とし、トータルステーションを用いて墳丘各所に任意に基準点を設置した。よって各基準点には、世界測地系に基づいたX、Y座標と標高(Z座標)が設定されている。なお、墳丘全体に対しトラバースを構成させて各測量点間の角度と距離を求め、そして始点から終点へと一周させることで全体の測量誤差を計算し、その誤差を均等に割り振る方法を検討したが、今回の測量では既存の世界測地系の座標に基づく原点杭を利用し、トータルステーションで基準点を設定した後、測量作業をすすめていくことにした。

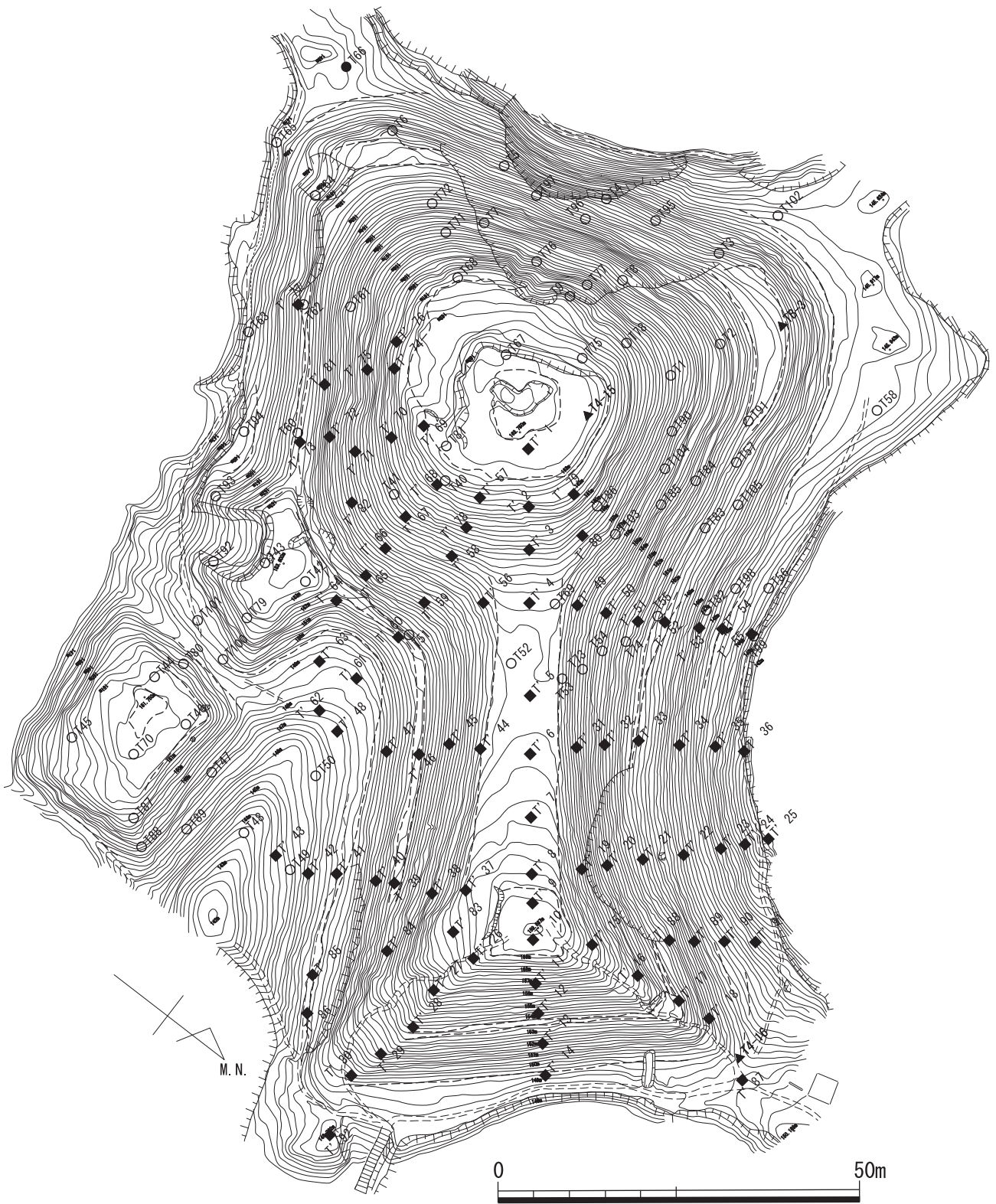
2008年度は、造出や陪塚、古墳周囲を含めた範囲を期間内で完了できるか見通しがつかなかったため、後円部と造出、そして陪塚を優先的に測量することにした。測量に先立ち、35箇所に基準点を設置した。設置した点の名称は、後円部北西側から西側、そして南西側の斜面にかけてがT1~T9、後円部東側斜面から造出、そして陪塚にかけてがT40~T45、陪塚墳頂から北側の谷地形までがT44~T50、南側くびれ部から北側くびれ部、そして後円部北西側方向がT51~T58、造出墳頂から後円部の南側を通り、南西側の方向がT43からT66である。急傾斜の斜面など平板測量が難しい場所では、任意に基準点を追加して作業をすすめた。結果的に、設置した基準点の合計は67箇所となった。後円部墳頂面や造出、陪塚、そして急傾斜の斜面には基準点を数多く設置した。とりわけ、後円部の西側斜面と北側斜面、そして造出と陪塚の間には多数の基準点を設けた。

**紙割り** 方眼マイラーシート上に、1/100の縮尺で、X、Y座標に基づく基準点を記入した。方眼マイラーシートは、隣り合う地区のシートどうしで必ず基準点を複数共有させ、墳丘各部分ごと、または地形的なまとまりごとに、1枚のシートになるべくおさまるように割りふった。

**平板測量の実施** 2008年度は、平板6台を、後円部墳頂、後円部北側、後円部西側、後円部南側、造出、陪塚にそれぞれ配置し、並行して作業をすすめた。後円部背面の急斜面では平板による測量が非効率かつ危険であったため、トータルステーションを測量に活用した。

以上のような方法と経過を経て、縮尺1/100、絶対高による25cm間隔の等高線の平板測量図を作成した。なお、2008年度は、後円部から造出、そして陪塚にかけての範囲の測量を完了させた。

(田上和彦)



▲測量原点      ○2008 年度基準点      ■2009 年度基準点

第7図 測量杭配置図 (縮尺 1/800)



第 4 表 2008 年度測量杭一覽

点名	X座標	Y座標	Z座標	点名	X座標	Y座標	Z座標
T1	10403.076	28302.160	158.690	T71	10367.269	28310.280	157.541
T2	10404.810	28294.401	154.678	T72	10362.582	28309.104	154.861
T3	10394.594	28285.837	150.269	T73	10421.181	28335.105	155.027
T4	10378.646	28291.598	149.583	T74	10425.014	28329.479	151.263
T5	10365.697	28298.450	150.182	T75	10392.754	28309.063	162.883
T6	10352.342	28305.708	150.742	T76	10378.142	28304.449	158.284
T7	10370.029	28305.642	156.340	T77	10385.168	28301.745	158.787
T8	10388.154	28297.778	156.868	T78	10395.543	28303.240	161.149
T9	10384.737	28304.553	161.185	T79	10385.915	28366.526	152.258
T40	10392.445	28333.178	161.810	T80	10384.692	28377.264	150.444
T41	10388.008	28340.544	158.533	T81	10388.701	28329.777	163.071
T42	10388.048	28357.442	153.296	T82	10430.786	28320.682	146.280
T43	10382.353	28359.444	153.722	T83	10424.003	28314.938	148.980
T44	10383.140	28381.293	151.554	T84	10417.677	28310.789	151.852
T45	10381.136	28395.031	150.007	T85	10416.144	28316.181	153.846
T46	10390.841	28382.811	151.526	T86	10408.546	28321.858	159.543
T47	10397.894	28384.862	147.547	T87	10394.845	28396.737	149.791
T48	10406.945	28387.485	143.655	T88	10398.496	28398.736	147.531
T49	10416.550	28386.057	145.970	T89	10401.100	28392.659	146.109
T50	10408.344	28375.078	146.682	T90	10408.548	28307.468	167.042
T51	10403.193	28352.517	151.713	T91	10415.023	28299.075	150.882
T52	10414.809	28343.062	157.079	T92	10377.284	28264.514	151.689
T53	10419.788	28338.189	156.889	T93	10371.222	28358.031	150.665
T54	10422.194	28332.206	153.599	T94	10367.457	28348.993	148.870
T55	10426.775	28325.241	149.631	T95	10386.714	28288.727	149.744
T56	10434.893	28312.776	143.371	T96	10378.574	28295.675	151.708
T57	10420.332	28304.636	149.245	T97	10371.654	28298.102	151.390
T58	10426.475	28285.719	145.361	T98	10431.531	28316.292	145.048
T60	10372.846	28343.962	152.097	T99	10437.908	28319.481	142.751
T61	10365.562	28326.700	155.793	T100	10387.665	28372.852	149.277
T62	10360.903	28331.102	151.506	T101	10381.749	28371.739	149.464
T63	10358.334	28339.087	147.635	T102	10398.239	28276.435	145.923
T64	10351.318	28319.474	150.389	T103	10414.365	28322.441	156.192
T65	10342.532	28318.225	146.883	T104	10412.835	28312.726	155.512
T66	10341.628	28304.104	147.514	T105	10425.138	28309.093	147.446
T67	10384.950	28316.196	163.530				
T68	10372.862	28313.450	161.323	T4-15	10399.169	28313.046	163.374
T69	10413.461	28332.585	157.606	T4-16	10476.857	28360.948	149.012
T70	10388.692	28390.649	151.513	TB-3	10408.987	28286.740	150.872

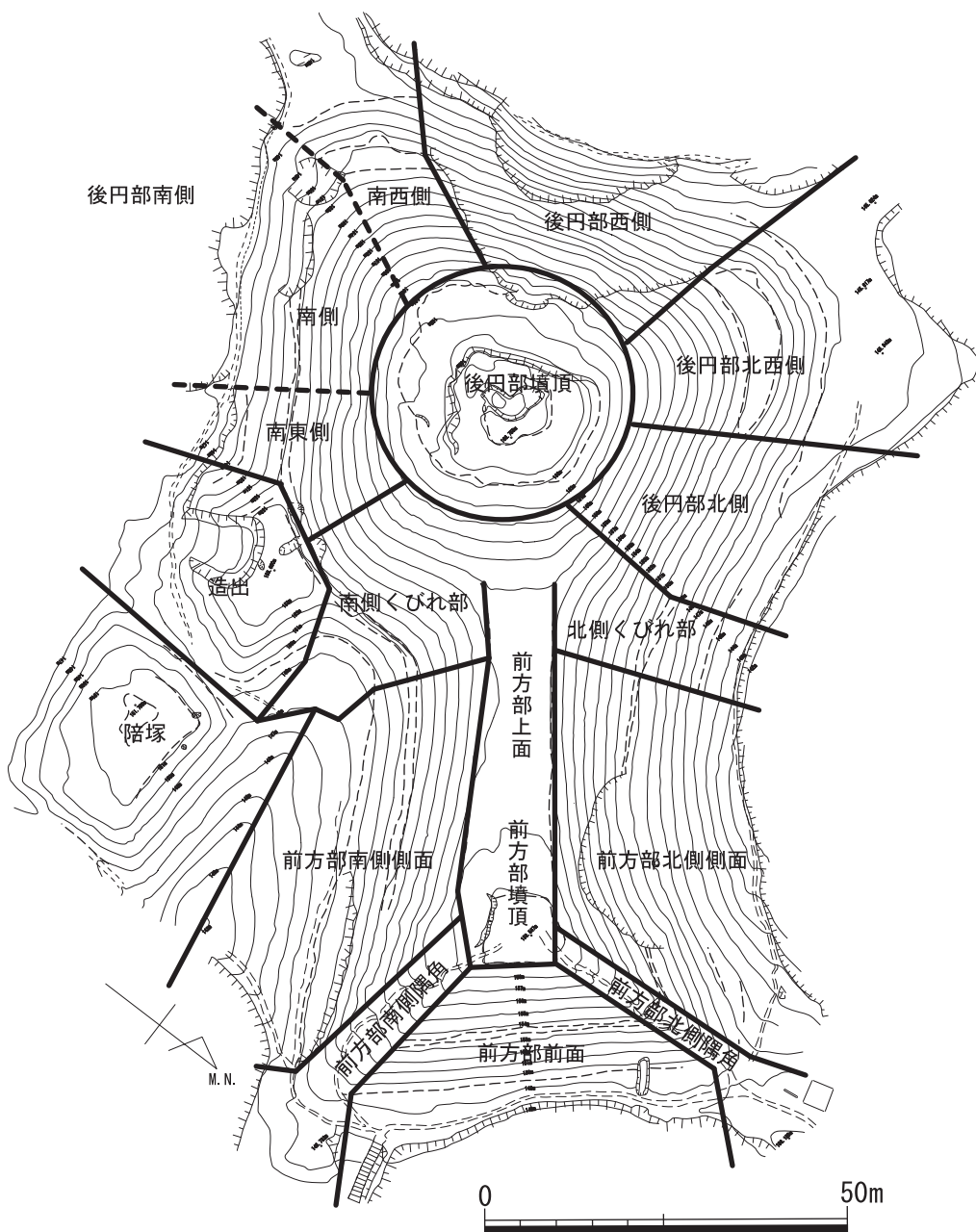


(2) 調査成果

2008年度に測量を行なった範囲は、後円部墳頂と、後円部北西側、北側、西側、南側、そして造出と陪塚である。順に調査成果を報告する。

なお、後円部斜面に関しては北西側と南西側とに1段目平坦面が良好な形で遺存しており、その箇所を基準にして次のように地区分けした(第8図)。すなわち、後円部北西側は1段目平坦面が良好に遺存している箇所を中心とする範囲である。後円部北側は北側くびれ部から北西側1段目平坦面の手前までの範囲である。後円部西側は北西側1段目平坦面と南西側1段目平坦面の間、つまり後円部背面の範囲である。後円部南側は南西側1段目平坦面を中心とする箇所から造出の手前までの範囲であり、記述にあたってはさらに南西側、南側、南東側に分けた。

(今津和也・高橋浩二)



第8図 調査区分図(縮尺1/1000)

## 後円部墳頂

後円部は、南西側から続く尾根と、東側へ続く尾根、そして西側へ続く尾根、北東側へ続く尾根の、4つがあつまる丘陵頂部の最高所に築かれる。

後円部墳頂には比較的広い平坦面が認められる。しかしながら、北西側から南東側にかけては、直線的で矩形に屈曲する段が巡り、2段になっている。また、墳頂の西側では斜面の崩落による影響がみられる。したがって後円部墳頂は、築造当初の姿が損なわれている可能性が考えられる。

具体的に見ていくと、墳頂平坦面の端部は、東側から北側にかけては標高 162.500～163.000m の等高線に沿って弧を描きながら巡っているが、北西側の箇所において直角に近い形に屈曲して、先ほど述べた段へとつながっていく。この段は、標高 162.750m～163.250m を中心とする等高線に沿う形で、南へ直線的に約 20m いった後、直角に屈曲して少し曲折しながら東へ約 16m 続く。したがって、この段の上面は、東側から北側にかけては円形で、西側から南側にかけては方形を呈している。段の規模は南北約 20m、東西約 16m で、段の高さはずっと高い南西側の箇所でも約 1m である。福井大学考古学研究会による調査では、この段にあたる部分は、-0.75m (後円部墳頂最高所を起点とする相対高による) の等高線に基づく点線で、とくに強調して表現されている。そのため、後円部墳頂平坦面に関することは詳しく説明されていないが、この点線で表現された部分があたかも後円部墳頂平坦面にあたるかのような印象を受けてしまう。後円部墳頂の東側から北側にかけて偏り、主に前方部に面する側が円形で背面側と南側のみが2段の方形となるこの段は、本来の墳頂平坦面の姿としてはやはり不自然である。なお、先にも述べたとおりこの段は最大で約 1m の高さがあるが、一巡しているわけではない。後円部墳頂面に円形または方形壇がのる姿としても不完全といえる。

この段の下側には広い平坦面が見られる。標高 163.000m の等高線に沿って東側を巡る墳頂平坦面の端部は、少しずつ標高を下げ、やや曲折した弧を描きながら南東側へつながる。南東側から南西側にかけては、標高 161.250m～162.500m の等高線の間を平坦面端部が巡る。これを東側から北側にかけての様相と比べると、平坦面端部は約 0.5～1.75m 低い位置を巡っていることになる。南東側から南西側では、段との間は幅約 5.0～8.5m の平坦面となるが、等高線は広範に歪んでいる。この先は、つまり背面側は、斜面の崩落による影響が著しく、平坦面がやや不明瞭となる。等高線には、乱れが見られるが、多少丸みを帯びながら北西側へつながっていく。

したがって、段の下側に見られる広い平坦面は、当初の様相を多少は反映しているのかもしれないが、墳頂平坦面本来の姿は留めていないものと言える。墳頂平坦面のうち当初の姿を留めているのは、段よりも上側の部分だけということになる。東側から北側にかけて良好に遺存している墳頂平坦面端部をたよりに、南東側から南西側にかけての平坦面端部の様相も考慮しながら推察すると、後円部墳頂平坦面の直径は約 26～29m 程の規模になるものと考えられる。

段の上側の部分にはやや南西寄りに、南北約 8.5m、東西約 3m、深さは約 0.3m の、くの字形を呈する陥没痕が存在する。そしてこの周囲には、掘削された土があたかも周りに堆積したかのごとく、南北約 9m、東西約 7.5～9m、高さ約 0.2m の高まりが認められる。後円部墳頂面の最高所は、この地点にあり、標高 163.750m を測る。

葺石はまったく認められなかった。なお、墳頂平坦面の北寄りの地点から円筒埴輪 1 片が採集された。  
(今津和也・高橋浩二)

### 後円部北西側

後円部斜面の中でも北西側は、墳裾と墳裾に伴う幅広の平坦面、そして 1 段目斜面および平坦面、2 段目斜面がもっとも良好に遺存している地区である。

墳裾は、斜面の崩落の影響がみられる後円部西側の地区を除いては良好に遺存しており、標高 146.000～146.250m の等高線の間を円弧に巡る。墳裾に沿ってすぐ外側には、幅約 4～5m の平坦面が形成されている。等高線は 145.500～146.000m のラインにほぼ対応する。墳裾に伴う平坦面の外側には、比較的平坦な地形が広がっているが、3 箇所に分かれて残丘のような不定形の高まりが見られる。高さはいずれも 1m 未満である。前方部北側隅角の付近から古墳北側の崖面縁を通り続いてきた山道は、この高まりの近くまできて不明確になる。高まりの下側はやや緩やかな傾斜面が続いた後に急峻な崖面となる。北西側の高まりの先は、下方へと続く尾根となる。

1 段目斜面は幅約 6.2～6.7m、高さ約 3.75～4.25m を測る。斜面の傾斜角度は墳裾付近が約 25 度で、その上部は約 30 度である。後円部北側の地区付近や、後円部西側地区寄りを除けば、等高線は円弧を描いて巡っている。1 段目平坦面は、弧状に巡る標高 150.000～151.250m の等高線に沿ってある。規模は長さ約 22m、最大幅は約 5.5m である。傾斜角度は約 13 度である。1 段目平坦面の中ほどから東側は、後円部北側の地区へ近づくにつれて徐々に幅が狭くなる。また、後円部西側地区寄りの箇所でも、1 段目平坦面の幅が狭くなる様子がうかがえる。この箇所では、斜面の崩落による影響が一部に及んでいる。

2 段目斜面は幅約 21m、高さ約 11.5m を測る。斜面の傾斜角度は約 30 度である。等高線は所々にやや乱れが見られるが、1 段目斜面と同じく円弧を描いて巡っている。

繰り返しになるが、墳裾から 1 段目平坦面までの高さは約 3.75～4.25m、1 段目平坦面から墳頂平坦面までの高さは約 11.5m である。墳裾から墳頂平坦面までの幅は約 32.5m、高さは約 16.5m である。墳裾から墳頂最高所までの高さは約 17.5m である。

葺石は、墳裾（西側の地区寄りの箇所）や 1 段目平坦面、2 段目斜面を中心に認められた。埴輪は確認されなかった。  
(上原利予・高橋浩二)

### 後円部北側

北西側の地区に近い箇所では墳裾の続きが認められた。墳裾は徐々に標高を下げながら東へ続き、標高 145.000～145.250m の等高線のところで不明確になる。墳裾の外側は、標高 144.750m の等高線あたりまでが比較的平坦だが、北西側の地区のように幅広の平坦面があるわけではない。墳裾に伴う葺石は認められなかった。この箇所からくびれ部側は、標高 145.000m の等高線を境に、上側は比較的急な傾斜面（傾斜角度約 31 度）、下側は緩やかな傾斜面（傾斜角度約 20 度）をなすが、墳裾と判断できるような明確な傾斜変換線を確認するには至らなかった。この比較的緩やかな傾斜面は下側へ約 4.5m 続いた後、急峻な崖面となる。崖面の際には幅 0.2～0.7m の山道が通る。山道は崖面から分岐した後は、北西側地区の平坦面

の方向へ続いていく。

1 段目平坦面に関しては、北側くびれ部では標高 149.250～150.500m の等高線の間を確認された。本地区でもこの標高とほぼ同じ 149.000～149.750m の等高線の間幅 1m 程度の比較的緩やかな傾斜面が見られるものの、1 段目・2 段目斜面との境は不明瞭で、確実性に欠ける。北西側地区の 1 段目平坦面から約 1m 下がった位置にこの緩傾斜面はあるが、1 段目平坦面は徐々に標高を下げながら、くびれ部へつながるものと推測される。

このように本地区では、1 段目斜面と 2 段目斜面の境界はやや不明瞭だが、標高 149.000～149.750m の等高線の間に見られる緩傾斜面を境にして両者を区分けする。1 段目斜面の傾斜角度は約 32 度である。等高線は直線的で、所々に乱れが見られる。2 段目斜面の傾斜角度は約 35 度である。等高線は同じく直線的につながっている。

墳裾から墳頂平坦面までの幅は約 28m、高さは約 17.5m である。墳裾から墳頂最高所までの高さは約 18.5m である。

葺石は 2 段目斜面に認められた。埴輪は確認されなかった。 (上原利予・高橋浩二)

## 後円部西側

後円部背面にあたるこの場所は、斜面全体にわたって崩落が複数認められる。このうち、後円部墳頂から発する幅約 42m の大規模な崩落は、北西側および南西側の 1 段目平坦面をかすめる形をなしている。崩落の下側は、等高線の間隔がものがたるように、とりわけ急傾斜（傾斜角度約 45 度）である。等高線は直線的であり、また所々に不規則な間隔や蛇行が見られる。この崩落のラインは標高 150.000m の等高線のところで不明確になるが、下側も連続した急斜面をなしている。この箇所では 40～50m にわたって直線的、あるいはわずかに弓形に外湾する等高線が見られる。

標高 150.750m の等高線の箇所を頂点とする崩落は幅約 27m の扇形をなし、高さ 8.75m にわたって急激に落ち込んでいる。この場所は、調査範囲内でもっとも急傾斜をなす箇所（傾斜角度約 50 度）であり、等高線の間隔もかなり密である。この崩落より下は崖面となり、垂直に近くさらに数 m 落ち込む。崖面の際には人一人が辛うじて歩ける幅の山道が通る。他にも数箇所に小規模な崩落が見られる。

墳裾は、後円部北西側では標高 146.000～146.250m の等高線の間、また南西側では標高 147.000～147.750m の等高線を中心にするが、本地区ではこれらの標高の等高線は崩落の内側に完全に位置しており、したがってすでに失われたものと考えられる。葺石も認められなかった。

なお、崩落の内側の標高 145.250m の地点から埴輪 1 片を表採したが、もとより原位置を保つものではない。 (上原利予・高橋浩二)

## 後円部南側（南西側および南側、南東側）

幅広の 1 段目平坦面が見られる箇所を中心とする南西側と、造出に隣接する南東側、そして両者の間の南側にさらに分けて記述をすすめる。

後円部南西側の墳裾は、斜面の崩落の影響がみられる西側地区の近くを除いては良好に遺存



しており、標高 147.250～147.750m の等高線を中心にして円弧を描いて巡っている。墳裾のすぐ外側には幅約 4～5m の平坦面が存在する。緩やかな蛇行を見せる標高 146.750～147.500m の等高線の箇所がこの平坦面にほぼ対応する。この墳裾に伴う平坦面は、南西の方向へ続いていく尾根稜線を切断して形成されている。この南西側には高さ 1m 未満の不定形な高まりが見られる。

ところが、南西側と南側との境には 1 段目平坦面から下に、小規模ながら複数の崩落が見られ、その影響がさらに下側の斜面にも強く及んでいる。南西側地区の墳裾の標高より少し低い 147.000～148.000m の等高線の箇所には、上下に曲折する高さ 1m 程度の段差（傾斜角度約 40 度）が見られるだけで、墳裾はきわめて不明確である。これら崩落の下側では、等高線は直線的または弓形に外湾する形を呈している。

墳裾が明確な形で再び現れるのは、造出に隣接する南東側の地区である。ここでは、標高 148.500～149.500m の等高線の間、弧を描きながら造出の側面へとつながっていく墳裾が観察できる。南西側地区の墳裾よりも約 1～1.5m 高い位置を巡る。墳裾のすぐ外側には、幅約 1.5～3m の平坦面が形成されている。

墳裾が確認された南西側と南東側の間、つまり南側地区では、墳裾が想定される標高の箇所には傾斜角度約 35 度の比較的急傾斜の斜面が見られるだけであった。また先述のように、やや低い標高 147.000～148.000m の等高線の箇所には、上下に曲折しながら南東側地区の方へ伸びる高さ 1m 程度の段差が見られた。この段差は、南西側地区との境から、南側地区東寄りの山道と分岐する地点（標高 147.500m）までの約 29m の範囲にわたって、やや蛇行しながら直線的に伸びる。この段差のすぐ外側は、崖面との間に山道が通り、約 0.7m の幅で平坦になっている。山道は段差に沿って、やはり蛇行し上下に曲折しながら、西は南西方向へ伸びる尾根へ向かって、東は造出方面へ向かってそれぞれ続く。この段差が確認された箇所は傾斜変換線として、墳裾や山道とは異なる細かな点線で表現した（標高 147.000m の等高線をはさんで上下に曲折する）。

福井大学考古学研究会による調査では、南側地区は、等高線が曲線ではなく全体的に直線的であることに疑念がもたれながらも、「葺石は表面に少ししかみられないが、段築を有することから、それほど大きな土砂の流出は認められず、この斜面の保存状態はまず良いと判断される」と報告されている（福井大学考古学研究会編 1978、4 頁）。測量図では、この傾斜変換線が墳裾にあたるものとされ、南西側地区の墳裾と一体的に結ばれている（南東側地区の墳裾とは切り離されている）。しかしながら、傾斜変換線と南西側地区の墳裾とを直接つなげると約 0.75m の段がついてしまうことや、傾斜変換線とその上側の段差、そして山道とはともに蛇行し上下に曲折しながら続いていること、また傾斜変換線外側には崖面が迫っており、幅広の平坦面が伴うような様相ではないことなどから、今回の調査ではこの傾斜変換線を墳裾と判断するには至らなかった。

それでは、南西側および南東側と、南側との箇所で、このような様相の違いが生じる要因にはどのようなことが考えられるだろうか。それには、2 つの要因が挙げられる。1 つ目は後円部南側の墳裾を 1～2m 程度低い位置に意図的に築いたとするものである。この場合、この傾斜変換線を墳裾とすることができる。後円部の南西側から南東側にかけての墳裾は途絶せずにつ

ながることになる。しかし調査では、後円部南側の墳裾のみが低い位置につくられた意義を明らかにするには至らなかった。

2 つ目は後世の影響により後円部南側の墳裾がすでに失われたとするものである。想定される標高に墳裾やそれに伴う平坦面が見られないのは、1 段目平坦面から下側の斜面が崩落していることに強く関係するものと考えられる。傾斜変換線は、後円部の南西側と南東側で確認された墳裾と比べて 1m 以上低い位置にあり、かつ明確な平坦面を伴っておらず、両者を同じ脈絡で捉えることは難しいように思われる。

従来の測量図ではこの傾斜変換線を後円部南西側の墳裾と一体のものとして描き、理解されてきた。しかし結果的に、今回の調査ではそのことを具体的に示す根拠は認められなかった。現時点では、後円部南側の墳裾は、すでに失われた可能性が高いものと判断される。南西方向へ伸びる尾根から造出方面へ続いていく山道と一体的な様相が見られることからすれば、傾斜変換線はこの山道に伴って形成された地形の傾斜と判断される。

1 段目斜面は、南西側地区では、等高線は円弧を描いて巡る。墳裾付近の傾斜は比較的緩やか（傾斜角度約 20 度）だが、1 段目平坦面の近くでは傾斜角度が約 30 度となる。南側地区の西半部は先述のように崩落の影響がみられる。南東側地区では、等高線は直線的に続き、途中から弧状を呈して造出の斜面へつながる。斜面の傾斜は、墳裾が遺存する箇所は傾斜角度約 25 度で比較的緩やかである。1 段目平坦面近くの傾斜角度は約 30 度である。

1 段目平坦面は、南西側地区では、標高 150.250～151.750m の等高線の間にならずに弧を描いて巡る。現存する長さは約 15m である。傾斜角度は約 11 度である。平坦面の幅は約 3.5～4.5m だが、大規模な斜面の崩落が見られる西側地区寄りでは約 2m の幅となる。西側地区寄りでは下側の斜面にかけての等高線が大きく乱れる。南側地区のうち東半部では、標高 150.750～152.250m の等高線の中に傾斜角度約 20 度の比較的平坦な面が見られ、これが 1 段目平坦面にあたると判断した。しかし、南西側地区の様相とは異なり、幅は約 0.8m と狭い。平坦面上端は標高 152.000m の等高線に比較的沿うが、下端は標高が一定しない。1 段目平坦面はわずかに曲折しながら南東側地区へ伸びていき、途中から弧状を呈して造出と後円部との間の平坦面につながる。南東側地区では、1 段目平坦面は標高 151.750～152.250m の等高線に沿って認められる。南西側地区の様相と比べると、約 0.5m 高い位置を巡っている。なお、福井大学考古学研究会による測量図では、南西側地区と南側地区の 1 段目平坦面は、下端のラインは斜面の崩落箇所ですて切れているが、上端のラインは直接つながれている。今回の調査では、南側地区西半部の崩落箇所には平坦面は見られず、よって 1 段目平坦面が上端のラインも含めて直接つながるような様相は認められなかった。

2 段目斜面は、南西側地区では、等高線は円弧を描いて巡る。1 段目平坦面の近くでは傾斜は比較的緩やか（傾斜角度約 25 度）だが、途中から墳頂平坦面にかけての傾斜角度は約 30 度となる。南側から南東側地区にかけては、造出に近い箇所を除いて、等高線は直線的で間隔も狭い。傾斜角度は平均して約 35 度を測る。斜面の崩落の稜線ははっきりとは見えないものの、広い範囲に等高線の乱れが認められる。

南西側地区では、1 段目斜面の幅は約 6m、高さは約 2.5～3.5m、2 段目斜面の幅は現況では約 20～21m、高さは約 10m である。そして墳裾から墳頂平坦面までの幅は、現況では約 29～

30m、高さは約 13.5～14m である。これを後円部北西側地区と比較してみると、墳裾から墳頂平坦面までの幅はおよそ 3m 程度狭く、また高さは 2.5～3m 程度低いつくりとなる。なお、墳裾から墳頂最高所までの高さは 16～16.5m であり、北西側と比べ 1～1.5m 低い。

また南東側地区では、墳裾から 1 段目平坦面までの幅は約 5～5.25m、高さは約 3m、1 段目平坦面から墳頂平坦面までの幅は約 18～19m、高さは約 10～10.5m である。そして墳裾から墳頂平坦面までの幅は約 23～25m、高さは約 13.5m である。同じく後円部北西側地区と比較してみると、墳裾から墳頂平坦面までの幅はおよそ 7.5～9.5m 程度狭く、また高さは 3m 程度低いつくりとなる。なお、墳裾から墳頂最高所までの高さは 14.5m である。

葺石は各所に散見されたが、とりわけ造出に近い 1 段目平坦面の箇所では人頭大のものが濃密に認められた。埴輪は確認されなかった。(今津和也・高橋浩二)

### 造出 (第 9 図)

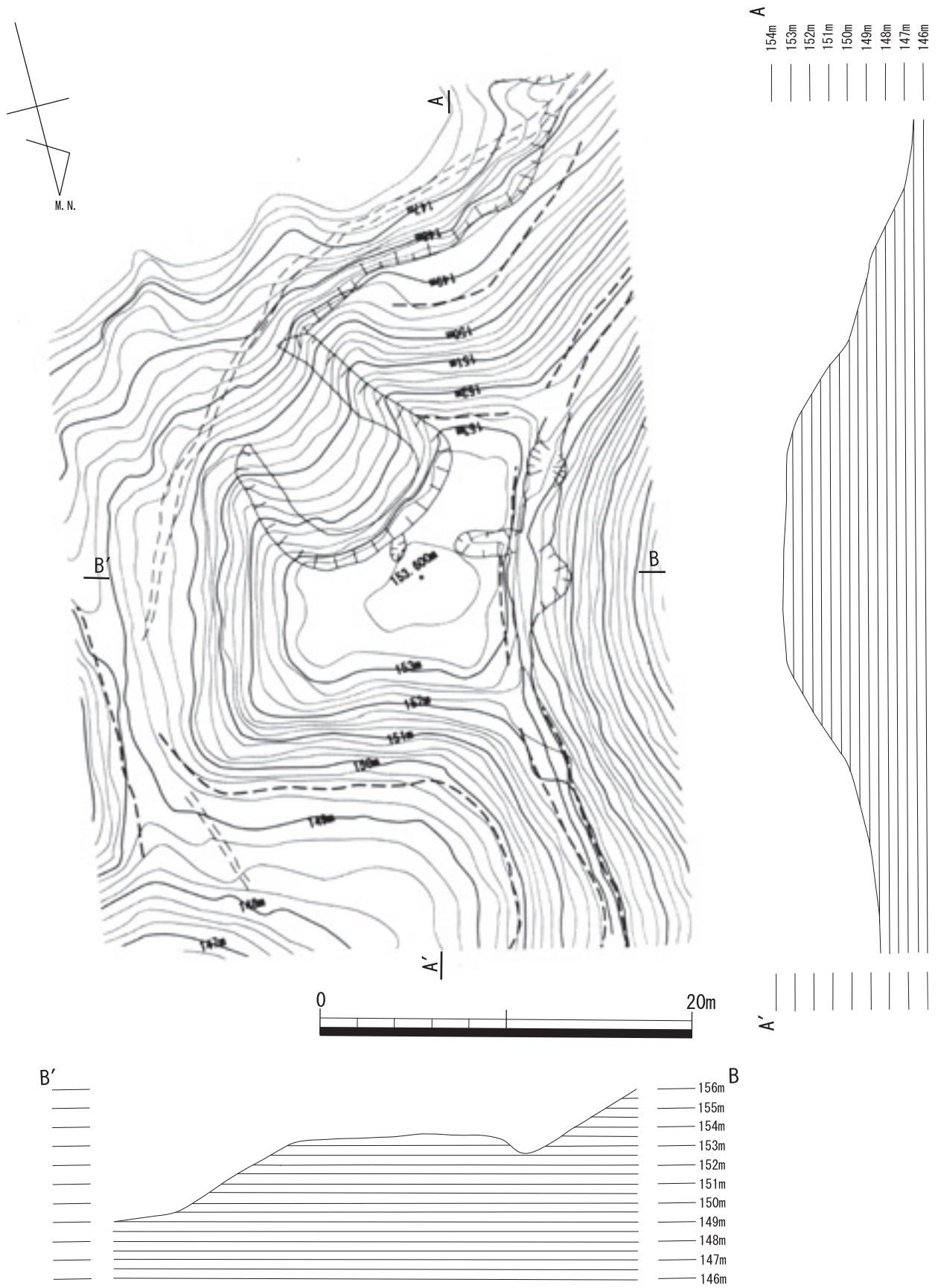
後述する陪塚とともに、東側へ伸びる尾根を利用して築かれている。造出は南側くびれ部から約 10m 離れた所にある。後円部 1 段目が張り出したような形をしており、本墳と一体のものとしてつくられていることがわかる。造出は平面が馬蹄形状の崩落がある南側と、山道による影響がみられる南東側を除けば、墳裾や斜面の遺存状況は良好である。造出の平面形態は、やや幅広の長形状を呈する。規模は墳裾で、南北約 26m、東西約 19m を測る。

墳裾について具体的に見ていくと、南側面では、標高 149.250m の等高線に沿って、後円部南東側地区から弧状に墳裾が巡る。次に述べる北側面と比べて、南側面の墳裾は 0.2m 程度低い位置にあるが、これは後円部南東側地区の墳裾の高さに合わせた結果と言える。次に北側面では、くびれ部から円弧を描いて巡ってきた墳裾は、やや標高を下げ標高 149.250～149.500m の等高線に沿って認められる。墳裾のすぐ外側には、谷地形の上面までに広い平坦面が見られる。しかし墳裾は、北東側隅角を巡ったところで不明確になる。東側面では、南側面や北側面の様相とは異なり、墳裾部の傾斜はきわめて緩く (傾斜角度約 25 度) になっており、そこに山道が通る。

造出斜面の傾斜角度は、約 30 度である。斜面の遺存状況は全体的に良好だが、北側面上半部の等高線がやや内湾することや、また北東側隅角稜線の上半部の傾斜が多少緩やかになるなど、後世の影響が看取される。

造出の西側には後円部との間に、後円部 2 段目裾に沿ってわずかに弓形を呈しながら巡る溝が存在する。したがって、この箇所には、後円部 1 段目平坦面は巡っていない。溝は、上面での幅 0.4～1.6m を測る。また、深さは約 0.5～0.75m である。溝の底面は、後円部 1 段目平坦面とほぼ同一の面をなしており、後円部南東側地区からくびれ部側へむけて徐々に高まる。

墳頂には、南東側隅角にかけての崩落が及ぶほか、小さな陥没痕が見られることを除けば、広い平坦面が認められる。墳頂平坦面の端部は、標高 153.000～153.250m の等高線に沿って巡る。墳頂平坦面は、南北約 14m、東西約 11.5m で、わずかに長形状をなす。造出の最高所の標高は 153.600m である。したがって、造出の墳裾から墳頂平坦面までの高さは、約 4.3m となる。造出の墳頂平坦面は、後円部 1 段目平坦面よりも約 0.85～1.3m 高くつくられている。ちなみに、後円部墳頂最高所と比べると、約 10.15m の標高差がある。



第9図 造出測量図・断面図（縮尺 1/300）



葺石は後円部斜面との間の溝の周辺に、人頭大のものが多数認められた。埴輪は墳頂平坦面と斜面から数片が確認された。

福井大学考古学研究会の調査では、この箇所を、「方形墳」や「造出であるのか張り出しであるのか迷う所」（福井大学考古学研究会編 1978、5 頁）、あるいは「張り出し」（同、11 頁）と表現しているが、今回の調査では造出に記述を統一した。陪塚のような方形墳ではなく、造出と記述した理由としては次のことが挙げられる。それは、造出と陪塚の間は幅広い溝によって尾根が完全に断ち切れ明確に区分けされているのに対して、後円部斜面と造出の間は幅の狭い溝はあるが、両者は断ち切られてはいないこと。そして、くびれ部および後円部と造出の埴裾が連続してつながることである。

造出は一般的に、くびれ部またはそこに近い前方部側面の、埴裾部分か、1 段目平坦面ないしはそこからやや下がった斜面に設けられる。手繰ヶ城山古墳の場合は、くびれ部からやや離れた後円部にあり、かつ造出の埴頂面が後円部 1 段目平坦面よりも若干高くなるというところが異なる。これが、尾根地形を利用したことによる影響なのか、あるいは造出の時期的変化を表しているのか、特殊な様相なのかは、今後の調査で明らかにすべき問題である。いずれにしても、本墳と一体となって計画的に築かれている様相から、造出として評価することにした。

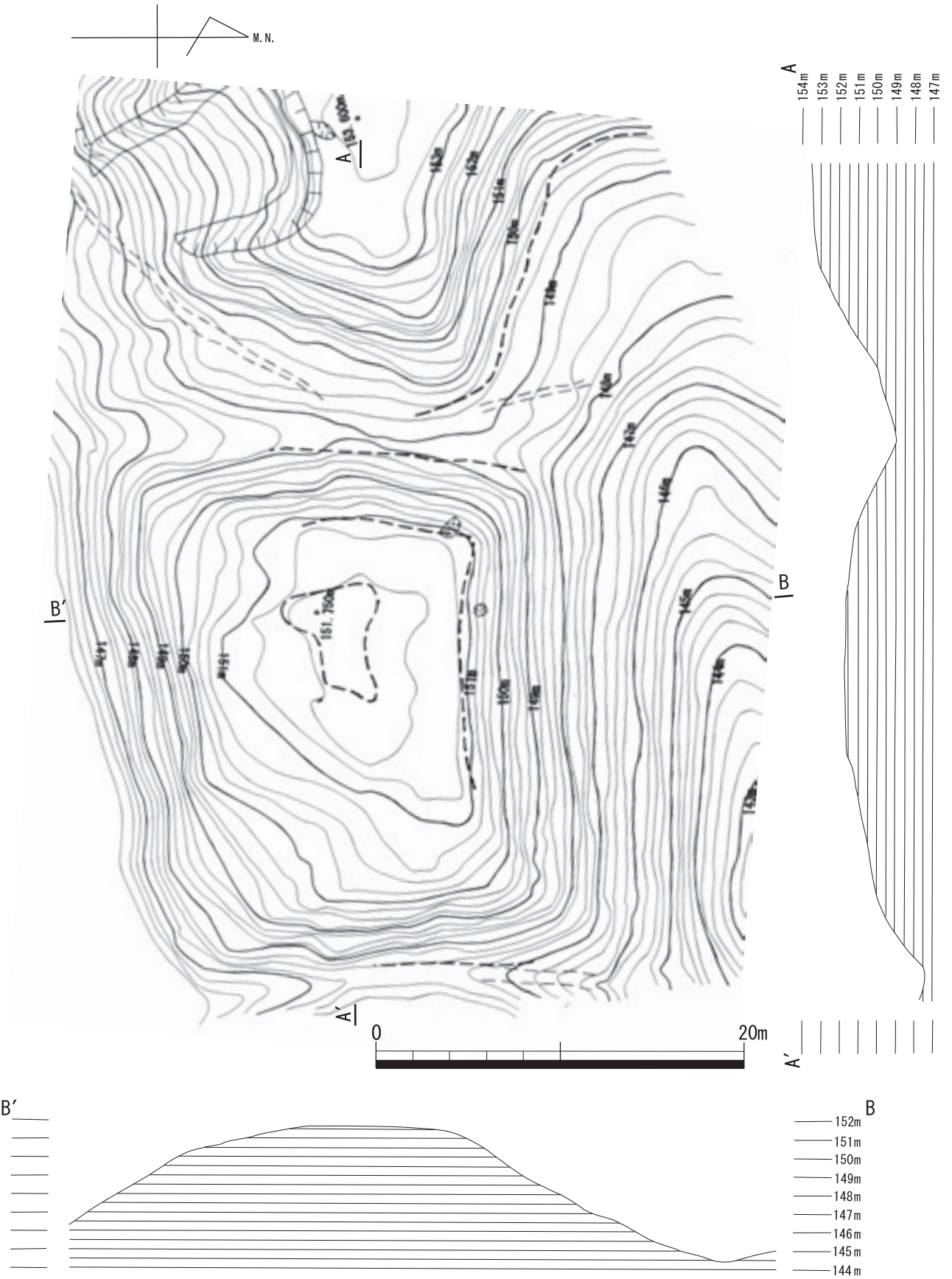
（千葉真吾・高橋浩二）

## 陪塚（第 10 図）

造出の東側に隣接して築かれる。造出との間と、その反対側の陪塚東側には、尾根に直交する幅広の溝が存在し、それによって尾根が断ち切られるとともに、この箇所の埴裾が構築されている。尾根の側面にあたる墳丘北側と南側とには、この溝は巡っていかないようである。墳丘北側には埴裾にあたるような傾斜変換や平坦面は認められない。また、墳丘南側は斜面が大きく崩落している。このように墳丘の北側と南側の埴裾は現況では明確さを欠くが、隅角部の様相から、その位置をおおむね特定することはできる。陪塚の平面形態は、長方形を呈する。規模は埴裾で、東西約 27.5m、南北約 24.0m を測る。高さは、尾根上側にあたる墳丘西側で約 2.75～3.25m、東側で約 4.25～4.75m である。陪塚の主軸は、造出のそれとは若干方向が異なり、前方部側へわずかに傾く。

埴裾について具体的に見ていくと、造出に面する西側面では、標高 148.500～149.000m の等高線に沿ってある。反対の東側面では、標高 147.000～147.500m の等高線に沿う。このように、尾根下側にある東側面の埴裾は、西側面のそれと比べて 1.5m 程度低い位置を巡っている。なお、東側面の埴裾に接して、幅約 0.7m の山道が通る。西側面および東側面の埴裾の様相を勘案すると、北・南側面には、標高 147.000～148.500m の等高線の間、埴裾を思わせるような傾斜変換等が見られるはずである。しかしながら北側面に関しては、標高 147.000～148.750m の等高線の間傾斜が若干緩やかになる（傾斜角度約 28 度）ものの、明確な傾斜変換等は現況では認められなかった。また南側面に関しては、東半部は急傾斜をなして崖面と連続する。等高線も大きく乱れている。南西側隅角は、等高線が北から東へ丸みを帯びながら屈曲する様相が見られ、辛うじて崩落を免れているかもしれない。

陪塚斜面の傾斜は平均すると約 30 度である。だが、個々に見ていくと、西側面の傾斜は多



第 10 図 陪塚測量図・断面図 (縮尺 1/300)

少緩やか（傾斜角度約 25 度）なのに対して、北側面はやや急（傾斜角度約 32 度）であり、そのままの傾斜で谷部へ続いていく。東側面では、等高線が乱れ、またその間隔が極端に狭まるなど、後世の影響が看取される。

墳頂には広い平坦面が認められるが、南側から東側にかけては削平や崩落の影響をうける。西側から北側にかけては、標高 151.000m の等高線に沿って平坦面の端部が巡る。平坦面の規模は、東西が 18.5～20m 程度、南北が 16～17m 程度と思われる。墳頂平坦面の中央付近には、長さ約 6.5m、幅約 5m の不定形な、約 0.3m の高まりが見られる。陪塚の最高所の標高は 151.750m である。ちなみに、造出墳頂最高所および後円部墳頂最高所と比べてみると、それぞれ約 1.85m、約 12m の標高差がある。

葺石は西側面の墳裾と北側面の斜面を中心に、人頭大のものが認められた。埴輪は確認されなかった。

（千葉真吾・高橋浩二）

### 参考文献

福井大学考古学研究会編 1978『手繰ヶ城山古墳（松岡 3 号墳）の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会

松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成 13 年～平成 15 年度町内遺跡範囲確認調査報告書』

#### 4. 2009年度の測量調査の方法と成果

##### (1) 調査方法

**基準点の設置（第7図）** 測量原点は2008年度調査と同様に、松岡町・永平寺町教育委員会によって2006（平成18）年に設置された、杭 T4-15 および T4-16、TB-3 とした。杭 T4-15 は後円部墳頂平坦面の北西端、杭 T4-16 は前方部北側隅角の外側、杭 TB-3 は後円部北西側1段目平坦面に、それぞれ位置する。そして、世界測地系に基づくこれら3つの杭を原点とし、トータルステーションを用いて墳丘各所に任意に基準点を設置した。よって各基準点には、世界測地系に基づいた X、Y 座標と標高（Z 座標）が設定されている。なお、墳丘全体に対しトラバースを構成させて各測量点間の角度と距離を求め、そして始点から終点へと一周させることで全体の測量誤差を計算し、その誤差を均等に振り分ける方法を検討したが、2008年度の調査方法に準拠して、既存の世界測地系の座標に基づく原点杭を利用し、トータルステーションで基準点を設定した後、測量作業をすすめていくことにした。

2009年度は、昨年度実施できなかった前方部とくびれ部を中心に測量を行った。測量に先立ち、70箇所に基準点を設定した。設置した点の名称は、後円部墳頂から前方部前面にかけてが T'1～T'14、前方部墳頂から前方部北側隅角にかけてが T'15～T'18、同じく前方部墳頂から前方部南側隅角にかけてが T'26～T'30 である。そして、前方部北側側面から T'8 を通り、南側側面を経て谷地形のところまでが T'19～T'25 および T'37～T'43、同じく前方部北側側面から T'6 を通り、南側側面を経て谷地形のところまでが T'31～T'36 および T'44～T'48 である。北側くびれ部には T'49～T'55、南側くびれ部には T'56～T'62、また南側くびれ部から後円部南東側の2段目斜面にかけて T'63～T'70 をそれぞれ設置した。急傾斜の斜面など平板測量が難しい場所では、任意に基準点を追加して作業をすすめた。また、昨年度の測量成果を確認するために複数の基準点を設置した。結果的に、設置した基準点の合計は92箇所となった。

**紙割り** 方眼マイラーシート上に、1/100の縮尺で、X、Y座標に基づく基準点を記入した。方眼マイラーシートは、隣り合う地区のシートどうしで必ず基準点を複数共有させ、墳丘各部分ごと、または地形的なまとまりごとに、1枚のシートになるべくおさまるように割りふった。また、昨年度と重なる範囲については、昨年度の測量図から等高線等をトレースし、整合性をはかりながら作業をすすめた。

**平板測量の実施** 2009年度は、平板5台を、後円部東側、北側くびれ部、南側くびれ部、前方部北側隅角、前方部前面にそれぞれ配置し、並行して作業を進めた。

以上のような方法と経過を経て、縮尺1/100、絶対高による25cm間隔の等高線の平板測量図を作成した。なお、2009年度は、予定していた前方部とくびれ部を中心とする範囲の測量が終了し、これにより手繰ヶ城山古墳の測量調査が完了した。 （東海林心・田上和彦）



第 5 表 2009 年度測量杭一覽

点名	X座標	Y座標	Z座標	点名	X座標	Y座標	Z座標
T'1	10396.862	28322.186	163.347	T'49	10416.765	28332.586	156.266
T'2	10402.546	28327.778	161.135	T'50	10420.321	28330.554	153.966
T'3	10406.875	28331.903	158.824	T'51	10424.298	28328.226	151.305
T'4	10412.081	28337.125	157.491	T'52	10426.989	28325.658	149.595
T'5	10421.196	28346.129	157.081	T'53	10430.928	28322.981	146.850
T'6	10426.925	28351.838	157.467	T'54	10433.256	28320.709	144.718
T'7	10433.150	28357.982	157.978	T'55	10436.629	28318.363	142.739
T'8	10438.807	28363.421	158.901	T'56	10407.633	28341.590	156.774
T'9	10441.691	28366.207	159.434	T'57	10396.950	28331.685	161.642
T'10	10445.338	28369.749	159.400	T'58	10399.999	28340.085	157.596
T'11	10450.092	28373.677	156.092	T'59	10401.892	28347.313	153.895
T'12	10453.213	28376.253	153.683	T'60	10402.802	28353.186	151.435
T'13	10456.311	28378.844	151.308	T'61	10402.821	28361.304	148.469
T'14	10459.786	28381.667	148.730	T'62	10402.385	28368.089	147.569
T'15	10451.585	28364.467	157.849	T'63	10397.539	28363.277	148.649
T'16	10459.071	28362.958	155.396	T'64	10393.245	28355.671	151.276
T'17	10465.530	28361.408	153.158	T'65	10393.666	28350.372	153.447
T'18	10470.128	28360.149	150.974	T'66	10392.857	28345.759	156.084
T'19	10443.168	28358.052	156.506	T'67	10391.712	28340.772	158.560
T'20	10445.236	28355.222	153.866	T'68	10391.583	28334.557	161.260
T'21	10448.077	28351.118	150.722	T'69	10384.541	28330.053	162.778
T'22	10451.574	28346.705	147.356	T'70	10382.546	28334.371	160.096
T'23	10454.543	28342.432	144.893	T'71	10380.445	28339.290	157.086
T'24	10456.422	28339.707	142.910	T'72	10376.554	28340.325	154.821
T'25	10458.255	28336.899	140.871	T'73	10374.233	28343.730	152.451
T'26	10441.538	28377.324	158.085	T'74	10376.142	28327.365	161.023
T'27	10440.762	28384.256	156.085	T'75	10373.617	28330.052	158.351
T'28	10442.316	28389.860	153.452	T'76	10373.748	28324.435	161.058
T'29	10441.810	28395.506	151.493	T'77	10360.243	28331.430	151.208
T'30	10441.045	28400.541	149.317	T'78	10398.639	28335.880	159.591
T'31	10430.787	28346.634	155.549	T'79	10405.723	28322.113	161.116
T'32	10433.211	28343.623	152.760	T'80	10410.575	28325.306	158.482
T'33	10436.070	28339.950	150.217	T'81	10370.947	28335.671	154.200
T'34	10440.403	28336.389	147.102	T'82	10385.113	28344.563	156.025
T'35	10444.086	28332.741	143.811	T'83	10436.962	28376.695	157.654
T'36	10447.344	28330.664	141.550	T'84	10432.350	28385.070	152.921
T'37	10434.015	28371.479	158.333	T'85	10427.395	28394.610	147.619
T'38	10431.132	28375.117	155.519	T'86	10430.673	28398.888	147.695
T'39	10426.431	28377.769	152.022	T'87	10479.418	28362.884	149.050
T'40	10424.411	28379.302	150.454	T'88			151.931
T'41	10419.965	28382.478	147.743	T'89			149.515
T'42	10417.143	28385.194	146.234	T'90			147.335
T'43	10412.264	28386.604	144.663	T'91			145.743
T'44	10421.581	28356.170	156.607	T'92			148.701
T'45	10418.108	28358.727	153.827				
T'46	10416.214	28362.675	151.487	T4-15	10399.169	28313.046	163.374
T'47	10412.797	28365.546	149.407	T4-16	10476.857	28360.948	149.012
T'48	10406.119	28368.432	147.372	TB-3	10408.987	28286.740	150.872

## (2) 調査成果

2009 年度に測量を行なったのは、前方部とくびれ部を中心とする範囲である。各地区は 33 頁第 8 図のように地区分けした。前方部上面および前方部墳頂、前方部前面、前方部南側隅角、前方部南側側面、南側くびれ部、前方部北側隅角、前方部北側側面、北側くびれ部の順に調査成果を報告する。 (高橋浩二)

### 前方部上面および前方部墳頂

前方部は後円部の北東面に築かれている。前方部上面には、前方部の形状にほぼ沿って、幅広の平坦面が見られる。この平坦面は、後円部 2 段目斜面の中ほど（標高 158.000m の等高線の地点）に取り付き、ここからくびれ部墳頂へむけて緩やかに下降する。その傾斜角度は約 7 度である。そして、くびれ部墳頂からは前方部墳頂へむかって、せりあがるように標高が徐々に高まっていく。傾斜角度は約 3～7 度である。前者を後円部隆起斜道、後者を前方部隆起斜道とする（近藤 2000）。

前方部上面の平坦面の形状についてさらに具体的に見ていくと、南東側すなわち平野とは反対側の平坦面端部は、くびれ部から隅角上端へむけてやや開きながら伸びていく。これに対して、北西側すなわち平野に面する側のそれは、くびれ部から前方部墳頂にかけて直線的に伸びていく。前方部墳頂から隅角上端にかけては、外湾する緩やかな弧を描く。つまり、前方部上面の平坦面端部は、墳丘主軸をはさんで若干異なる現況を呈している。これは後述のように、北西側の前方部側面には大規模な斜面の崩落が見られ、さらに崩落の上部を巡る等高線にも比較的広い範囲に乱れが生じており、これらのことから斜面の崩落による影響が前方部上面にまで及び、それによって平坦面端部の形状がわずかに歪められたものと判断される。本来は南東側と同様に、くびれ部から隅角上端へむけてもう少し開きながら伸びていくものと推測される。前方部上面平坦面の規模は、後円部に取り付く箇所から前方部墳頂面まで含めて約 52m を測る。幅はくびれ部の箇所約 9m、前方部墳頂面の西側で約 13m である。

前方部墳頂には、墳丘主軸方向が約 9m、それと直交する方向が約 9.5m、高さ約 0.55m の方形の高まりが、標高 159.000m の等高線にほぼ沿う形で見られる。南西面の前方部隆起斜道との境目には、わずかな傾斜変換が認められるだけで、壇や区画溝などは見られない。北東面も同様に壇や区画溝などは見られず、直ちに前方部前面の斜面となる。北西面のすぐ外側には前方部平坦面の端部が巡る。南東面には長さ 7.5m にわたって高さ 0.5m 程の削平が見られる。この削平箇所の西側には目立った地形の改変は見られないが、158.000～158.500m 前後の等高線が直角に近い形で屈曲しており、この付近にまで削平による影響が及んでいたことを推測させる。南東面は南側隅角にかけての箇所が平坦化し、それによってくびれ部側から続く前方部平坦面の端部も失われている。この箇所では等高線が、約 8～9m にわたって直線的となる。このように南東面に関しては、当初の姿がかなり損なわれていると判断される。前方部墳頂の高まりは、主軸から北西側に寄って見られるが、本来は南東側へもう少し伸びていたものと思われる。

前方部墳頂と前方部隅角との接点は、北側隅角上部では約 3.5m、南側隅角上部では約 2m の幅で等高線の形状がやや直線的となる。隅角線上には幅約 0.7～1.0m の山道があるが、山道はこの等高線が直線的となった箇所を通過して墳頂部へ至る。

前方部墳頂最高所の標高は 159.567m を測る。後円部墳頂最高所（標高 163.750m）とは約 4.183m の比高差がある。また、くびれ部墳頂周辺で標高がもっとも低い箇所、つまり後円部隆起斜道から前方部隆起斜道へ移行する地点（標高 157.019m）との比高差は約 2.55m となる。

なお、前方部上面および前方部墳頂では、葺石は認められなかった。前方部墳頂では、少数ながら円筒埴輪片が見られた。（鵜野千恵美・高橋浩二）

## 前方部前面

前方部前面では、墳裾と墳裾に伴う幅広の平坦面、そして 1 段目斜面と平坦面、2 段目斜面が良好に遺存している。

墳裾は標高 149.250～149.750m の等高線の間をほぼ一直線に伸びる形で認められる。ただし、北側隅角付近は不明確である。墳裾の標高は、北側隅角側と比べて南側隅角側が約 0.5m 低い。なお、北側隅角寄りには長さ 5.5m の長方形の落ち込みが見られるが、これは近年のものである<sup>(1)</sup>。墳裾の外側には最大幅 5m 程度の平坦面が形成されている。この平坦面の東側は、標高 148.500m の等高線より下側が急傾斜の崖面となる。崖面は、とりわけ前方部の中ほどから北側へやや寄った箇所では、墳裾から約 3m の位置にまでせまっている。

1 段目斜面は幅約 6～6.5m、高さ約 3.75～4m を測る。傾斜角度は約 32 度で、比較的急な傾斜をなす。等高線は、多少歪みが見られる両隅角付近を除けば、墳裾や斜面の形状に沿ってほぼ直線的に伸びている。1 段目平坦面は標高 153.250～153.750m の等高線の間、墳裾と並行して築かれる。平坦面の幅は約 0.5～1m である。傾斜角度は約 18 度である。

2 段目斜面は幅約 9～9.5m、高さ約 5.25～5.5m を測る。2 段目斜面は傾斜角度が約 30 度で、1 段目平坦面を境にして斜面の傾斜がやや緩やかになる。等高線は、1 段目斜面と同じく、多少歪みが見られる両隅角付近を除けば、ほぼ直線的に伸びている。

主軸上において、墳裾から 1 段目平坦面までの高さは約 4m、1 段目平坦面から前方部墳頂までの高さは約 5.8m、墳裾から前方部墳頂最高所までの高さは約 10.1m となる。

葺石は、墳丘斜面には散見されたが、墳裾ではほとんど認められなかった。埴輪もまた確認されなかった。

最後に山道に関して記す。前方部の東側には丘陵下から続く階段がある。この階段を上った標高 148.500m の地点で、南側隅角方向へ伸びる 2 つの山道と、前方部前面側へむかうものの三方に別れる。前方部前面側へむかう山道は、幅約 0.5～1.2m で、崖面寄りを通して北側へ伸びる尾根筋へ続いていく。崖面が墳裾にもっともせまる箇所においても、山道によって墳裾が損なわれるような様子は現況では見られなかった。（小浦方志織・高橋浩二）

## 前方部南側隅角

南側隅角は、墳裾から前方部墳頂に至るまで幅広化（約 6～11m）し、かつ隅角稜線も認められない。1 段目平坦面については、前方部前面からの続きで想定される箇所には、それが認められなかった。やや下の標高 152.000～153.000m の等高線の箇所の傾斜が若干緩やかになるが、1 段目平坦面を確認するには至らなかった。前方部南側側面に見られる 1 段目平坦面とのつながりについても、同様に不明確である。また、1 段目と 2 段目の斜面については、前方

部前面および南側側面の様相と比較して、やや緩やかな斜面となっている。とりわけ、2 段目上半部は前方部墳頂面から緩やかな傾斜面が引き続いており、それによって前方部墳頂面と 2 段目斜面との境界は不明瞭となる。前方部前面および南側側面では一部の箇所を除いて等高線の乱れがほとんどなく、かつ等高線が等間隔で巡るのに対して、南側隅角では等高線の乱れが目立つ。このように南側隅角は一般的な隅角の様相とは大きく異なっている。北側隅角と比べてみても、その違いは明らかである。以上のことから南側隅角については、後世の改変が著しく、原形を留める箇所が少ないものと判断される。福井大学考古学研究会編 1978 の測量図では隅角にも 1 段目平坦面および 2 段目裾線が巡らされているが、後世の影響を受けてこの箇所ではそれらが途切れるものと今回の調査では判断した。

墳裾は、前方部前面と南側側面とのつながりから、標高 147.750～149.250m の等高線間に存在することが想定されるが、それと認識できるような明確な傾斜変換点や葺石等は認められなかった。また、墳裾に伴う平坦面については、標高 149.000m の等高線をはさんで傾斜が緩やかになるものの、その有無を確認するには至らなかった。やはり墳裾についても後世の改変が及んでいるか、あるいはこの箇所についてはそもそも明確な形で墳裾を築いていなかったことが考えられる。

葺石は認められなかった。また、埴輪についても確認されなかった。

南側隅角の周辺では 2 つの山道が見られるが、ひとつは幅広化した隅角の中央部を蛇行しながら前方部墳頂面へ続いている。もう一方は、標高 148.000～148.250m の等高線に沿って隅角墳裾を巡った後、陪塚方面へ伸びていく。山道の幅は約 0.2～0.6m である。

最後に、隅角の東側に存在する南北約 10m、東西約 9m 程度の不定形で低平な高まりについて記す。これは、西側は標高 148.500m、南東側から北東側にかけては標高 147.000m の等高線にほぼ沿う形で見られる。南側は削平を受け多少窪むとともに、標高 148.000m の等高線より下は緩やかな傾斜面となった後、急傾斜の崖面となる。北側は階段の造成に伴う掘削を受けている。高まりの最高所の標高は 148.732m である。この高まりは、古墳築造時の残丘と考えられる。  
(及川実沙子・高橋浩二)

### 前方部南側側面

幅広化した南側隅角に隣接する場所は 1 段目から 2 段目にかけて比較的広い範囲に、等高線の蛇行が見られ、また等高線の間隔が不規則な箇所が目立つ。1 段目平坦面にあたる箇所はわずかながら傾斜が緩くなる（標高 152.500～153.250m の等高線の辺り）が、1 段目から 2 段目へ斜面が連続しており、くびれ部側から巡っている平坦面は認められない。したがって、南側隅角だけでなく、西側に隣接する墳丘斜面にも後世の影響が及んでいるものと言える。

また、1 段目下半部には、高さ約 2m、幅約 26m の崩落が見られる。崩れた土砂の影響によって、崩落の下側の傾斜はかなり緩くなっている。それほど大規模な崩落ではないが、崩れた土砂は墳裾にまで及んでおり、その影響で墳裾は多少不明確になっている。この箇所の墳裾が南側へ若干膨らんでしまっているのは、こうした理由による。

これらの箇所を除くと南側側面の遺存状況は良好である。墳裾は、くびれ部から南側隅角へむけて、やや開きながら伸びていく。墳裾の標高は、くびれ部近くでは 149.250m、前方部中



程では 148.250m、南側隅角近くでは 147.750m を測る。つまり、墳裾はくびれ部から南側隅角へむけて徐々に標高を下げながら南側側面を巡っている。くびれ部側と南側隅角側の墳裾とでは、約 1.5m の高低差がある。くびれ部側の墳裾の外側には、かなり広い平坦面が存在する。また、前方部の中程から南側隅角にかけては、墳裾の外側には幅約 0.5～2m の平坦面が認められる。幅は一定ではないが、これは墳裾に伴う平坦面である。上面には造出の方向へと通じる山道が重複している。この平坦面より南側は、谷地形へと続く傾斜面となる。

1 段目斜面は幅約 5～7m、高さ約 2～4m を測る。傾斜角度は約 28 度である。等高線はほぼ等間隔であり、南側隅角へむかってやや開きながら伸びていく。

1 段目平坦面は標高 151.500m～152.000m の等高線を中心に、墳裾と並行して築かれている。平坦面の幅は約 1～1.2m である。傾斜角度は約 18 度である。前述のように、南側隅角に隣接する箇所においては、1 段目平坦面は認められなかった。

2 段目斜面は幅約 8～9m、高さ約 4.5～5m を測る。傾斜角度は約 32 度である。等高線はほぼ等間隔であり、南側隅角へむかってやや開きながら伸びていく。

葺石はくびれ部から前方部中程にかけて、墳裾や 2 段目斜面に認められた。埴輪は確認されなかった。

南側の陪塚との間は、標高 148.000m の等高線の位置からはじまり、緩やかに東へと下降していく谷地形となる。地形がもっとも低くなる標高 142.000m の地点と前方部南側側面の墳裾平坦面との標高差は約 5.5m である。この谷地形の東側は調査範囲外のところで崖面となる。崖面上側に沿っては、南側隅角のところから陪塚の方向へと山道が通じている。山道の幅は約 0.5～0.7m である。  
(河合陽介・高橋浩二)

## 南側くびれ部

南側くびれ部では、墳裾と墳裾に伴う平坦面、そして 1 段目斜面と平坦面、2 段目斜面が良好に遺存している。

墳裾は、前方部南側側面および造出北面の墳裾の位置よりも 0.5m ほど高い標高 149.750m の等高線に沿って認められる。墳裾の外側には、標高 148.000m の等高線の位置からはじまる谷地形との間に、広い平坦面が見られる。

1 段目斜面は幅約 4～4.5m、高さ約 2～2.25m を測る。傾斜角度は約 24～26 度であり、後円部および前方部の斜面と比べて緩やかなつくりとなる。等高線は部分的に歪みが見られるが、全体的によくくびれ部の形に沿って巡っている。

1 段目平坦面は標高 151.750～152.000m の等高線に沿って巡る。平坦面の幅は約 1～1.5m である。傾斜角度は約 10 度である。1 段目平坦面は、造出との接点において途切れた後、造出南西側の後円部との接点から再びあらわれる。造出西面の後円部との間は、1 段目平坦面の高さよりも約 0.5m 高くなっている。造出の項（前節、34 頁）で前述したように、造出と後円部との間には、上面幅約 0.4～1.6m、深さ約 0.5～0.75m の溝が存在する。この溝は、後円部の形状に沿い緩やかな弧を描いて 1 段目平坦面へと伸びていき、徐々に幅を狭めて、くびれ部から前方部への屈曲地点で消失する。

後円部墳頂面までの 2 段目斜面は幅約 22～24m、高さ約 10.75～11m を測る。ちなみに、く

びれ部の1段目平坦面から前方部平坦面が後円部へ取り付く地点までの高さは約6mである。これは、2段目斜面の高さのおよそ半分にあたる。2段目斜面の傾斜角度は約25度で、1段目斜面と同じく緩やかである。等高線は、樹木などの影響で所々に歪みが見られるが、1段目斜面と同じく全体的によくびれ部の形に沿って、造出の上側の斜面へと続いている。

造出の上側、つまり後円部南東側の2段目斜面は、傾斜角度が約28度で、やや急傾斜となる。くびれ部と比較すると、等高線の間隔も徐々に狭まる。後円部南側の2段目斜面はさらに傾斜が急になる。

葺石は後円部南東側の2段目斜面で散見された。福井大学考古学研究会による調査ではくびれ部の墳裾および1段目平坦面を中心に広い範囲で葺石が確認されているが、今回の調査では朽木等の影響もあり、明確にすることはできなかった。埴輪は確認されなかった。

なお、南側くびれ部から北側くびれ部までの幅は、墳裾において約45.5m、1段目平坦面において約30.5mを測る。南側くびれ部の墳裾から後円部墳頂面までの幅は約27.5～29m、高さは約13.25mである。南側くびれ部の墳裾から墳頂最高所までの高さは約14mである。南側くびれ部の墳裾から前方部平坦面が後円部へ取り付く地点までの幅は約17m、高さは約8.25mとなる。  
(北村史織・高橋浩二)

### 前方部北側隅角

北側隅角においても、南側隅角ほどではないが、1段目平坦面から前方部墳頂面にかけて幅広化(約3～3.5m)が見られる。2段目斜面は、前方部前面および北側側面の墳丘斜面の様相と比較して、やや緩やかな斜面(傾斜角度約20度)となっている。等高線は山道の影響もあり乱れが目立つ。等高線の間隔が不規則な箇所(標高155.000～156.000mの等高線の間)も見られる。

1段目平坦面に関しては、標高153.000～153.750mの等高線の間、長さ約4m、幅約3.5mの比較的広い平坦面が認められる。しかし、前方部前面および北側側面では1段目平坦面の幅は0.5～1m程度であり、様相を異にしている。また、標高に関しても、前方部前面(153.250～153.750m)および北側側面(北側隅角寄りの箇所:153.000～153.250m)との間には若干の齟齬がみられる。この平坦面の上部に接しては、標高153.750～154.500mの等高線の間、小規模な削平が見られる。規模は約3.5mであり、平坦面と幅を揃える。これらのことから北側隅角の1段目平坦面は、現況では比較的広い面となっているが、これは後世の削平による影響が関係しており、本来は前方部前面および北側側面の箇所ともう少しスムーズにつながっていたものと考えられる。前方部南側隅角と同様に、後世の影響を受けて、1段目平坦面および2段目裾線はこの箇所ですっきりと途切れるものと判断した。

1段目斜面は、山道による影響が多少見られるが、前方部前面および北側側面の等高線とも矛盾なくつながる。傾斜角度は約27度である。1段目斜面の下半部は傾斜が多少緩やかになる。

墳裾は、前方部前面とのつながりから、標高149.000mの等高線付近に存在することが想定される。等高線は前方部前面から北側側面にかけて隅角状に屈曲しているのであるが、しかし墳裾と認識できるような明確な傾斜変換点や葺石等は認められなかった。また、墳裾に伴う平坦面については、標高148.750mの等高線の辺りから傾斜が緩やかになるものの、その有無を

確認するには至らなかった。

葺石は北側隅角には認められなかった。埴輪などの遺物は確認されなかった。

前方部前面外側の崖面寄りを巡ってきた山道は、尾根の鞍部（標高 149.000m の等高線の箇所）で、北側隅角へ伸びていくもの、古墳北側の崖面方向へ巡っていくもの、そして北側の尾根方向へ続いていくものの三方へ分岐する。尾根は緩やかに上りながら北側へと伸びていく。東屋と案内板がある辺りはかなり平坦になっているが、背面は崖面となる。

（東海林心・高橋浩二）

## 前方部北側側面

北側側面の中程から北側隅角寄りにかけては、標高 156.000m の等高線の箇所を頂点とする最大幅約 25m の大規模な崩落が見られる。この崩落の内側は傾斜がやや急であり、傾斜角度は平均で約 40 度を測る。等高線には蛇行が見られ、また間隔も不規則な箇所が目立つ。1 段目平坦面がかつて存在していた箇所から下側は傾斜がやや緩くなり、傾斜角度は約 25～30 度となる。等高線の乱れは 1 段目斜面にまで及んでいる。このように北側側面のこの場所では、崩落によって 1 段目から 2 段目までが大きく損なわれている。また、等高線の蛇行や等高線間隔の不規則な箇所は、この崩落の上側でも多く認められる。稜線は明確ではないが、崩落の影響は前方部上面にまで及んでいるものと判断される。

この崩落部分を除けば、北側側面の遺存状況は比較的良好である。崩落部分の西側つまりくびれ部側と、東側つまり前方部前面側とにわけて、具体的に述べていく。

北側くびれ部の埴裾は標高 145.000～145.250m の等高線を中心にして認められるが、前方部側面のくびれ部側では埴裾と認識できるような明確な傾斜変換や葺石等は見られなかった。標高 144.500～145.250m の等高線の間は傾斜が若干緩くなる（約 25 度）ものの、埴裾に伴うような平坦面を確認するには至らなかった。1 段目斜面は比較的残りが良いが、くびれ部側では所々に等高線の乱れが認められる。等高線はわずかに弧を描きながら、くびれ部へつながる。1 段目斜面の傾斜角度は約 30 度である。くびれ部では標高 149.250～150.500m の等高線の中に 1 段目平坦面が認められる。くびれ部から続く 1 段目平坦面は、しだいに幅が狭く不明瞭なものとなり、崩落によって完全に分断される。1 段目平坦面の上端は標高 150.250～150.500m の等高線に沿って巡っているのだが、下端は標高が一定せず、その下側の標高 149.250m の等高線までの傾斜が緩やかとなる。崩落部に近づくとしたがって 1 段目平坦面の幅が狭く不明瞭になるのは、下端部がすでに流出していることによるものと考えられる。2 段目斜面は所々に等高線の乱れが散見されるが、全体的に埴丘の残りは良い。等高線はわずかに弧を描いて、くびれ部へつながる。2 段目斜面の幅は約 10～11m、傾斜角度は約 36 度である。前方部側面のくびれ部側では、葺石は 1 段目から 2 段目の斜面や平坦面に散見されたが、埴輪は確認されなかった。

次に前方部側面のうち前面側の様相について記す。前方部前面の埴裾と同じ標高(149.750m)の位置には埴裾は認められず、この位置には 1 段目斜面が巡っている。1 段目斜面の傾斜は標高 148.000m の等高線の辺りから緩やかになるが、この箇所に埴裾と考えられる傾斜変換が約 6.5m の長さで確認された。また、さらに下側の標高 147.000～147.750m の等高線の間にも、

ごくわずかな傾斜の変化だが、およそ 6m の長さで傾斜変換が認められた。この傾斜変換より下側は、崖面へとつながる比較的緩やかな斜面である。墳裾からこの箇所までの、つまり標高 147.000~148.000m の等高線の間には、わずかな幅だが墳裾に伴う平坦面が見られる。1 段目斜面は幅約 8m、高さ約 5m を測る。傾斜角度は約 35 度で、比較的急な傾斜をなす。等高線は多少乱れが見られる上半部を除いては、ほぼ直線的に伸びている。1 段目平坦面は標高 152.500m~153.250m の等高線の間に見られる。平坦面の幅は 0.5m である。前方部前面の 1 段目平坦面（標高 153.250~153.750m）と比べてみると、若干低い位置を巡っている。2 段目斜面は幅約 11~12m、高さ約 6~6.5 を測る。傾斜角度は約 31 度で、1 段目斜面より若干傾斜が緩まる。等高線は、下半部は規則的な間隔でやや外側に開きながらつながっているのに対し、中位から墳頂面にかけては蛇行や不規則な間隔の箇所が広い範囲に見られる。

なお、葺石は墳丘斜面に少数見られた。埴輪は確認されなかった。

北側隅角外側の尾根鞍部で枝分かれした山道は、ここから丘陵崖面へむかって下降した後、標高 141.000~143.000m の等高線のところに見られる崖面の縁に沿って続く。途中からは緩やかな登り道となって後円部の方向へ伸びていく。山道の幅 0.4~0.7m である。

（瀨瀬文佳・東海林心・百瀬香菜子・高橋浩二）

## 北側くびれ部

北側くびれ部では、1 段目斜面および平坦面、そして 2 段目斜面が比較的良好に遺存している。墳裾は南側くびれ部と対向する箇所に認められるが、古墳北側はとりわけ後円部の中程から前方部隅角にかけては全体的に墳裾の残りはよくない。

北側くびれ部の墳裾に関しては、標高 145.000~145.250m の等高線を中心とする箇所を境にして、上側が約 30 度、下側が約 21 度と斜面の傾斜角度が変化する。南側くびれ部ほど墳裾の状況は明確ではないが、この傾斜変換点の箇所が墳裾にあたるものと判断した。この傾斜変換点の箇所には、部分的だが葺石も認められた。墳裾の外側は、標高 144.500m の等高線の間がやや緩やかな傾斜面となる。墳裾は、後円部から前方部にかけて、外湾するわずかばかりの弧を描く。南側くびれ部と異なり、くびれの屈曲はほとんど見られない。北側くびれ部の墳裾は、南側くびれ部のそれ（標高 149.750m）と比べて約 4.5~4.75m 低い位置にある。前方部側面の墳裾とのつながりは後述のように明らかではない。また、後円部墳裾との直接的なつながりも現況では不明確である。北側くびれ部の墳裾の標高は、前方部北側隅角付近で確認された墳裾（標高約 147.750m）よりも約 2.5m 低く、また後円部北西側の墳裾（標高約 146.000~146.250m）と比べると約 1m 低い。

1 段目斜面は幅約 7m、高さ約 4~4.5m を測る。傾斜角度は約 30 度である。等高線はわずかな屈曲が見られるだけで間隔も狭い。標高 147.000~148.000m の箇所はとりわけ等高線の間隔が狭く、急な傾斜をなしており、この影響は後円部北側へも多少及んでいる。

1 段目平坦面は標高 149.250~150.500m の等高線の中に認められる。ちなみに、南側くびれ部のそれ（標高 151.750~152.000m）と比べると、約 1.75~2.5m 低い位置を巡っていることになる。また、前方部北側隅角付近で確認された 1 段目平坦面（標高 152.500m~153.250m の等高線の間）よりも約 3m 低く、後円部西側のそれ（標高約 150.000~151.250m）と比べると



約 1m 低い。墳裾のところで指摘したのと同じく、北側くびれ部の 1 段目平坦面は、他の箇所と比べて標高の低い位置に存在する。北側くびれ部の 1 段目平坦面の幅はもっとも広いところで約 2m を測る。傾斜角度は約 18 度である。この箇所の周辺には人頭大の葺石が多数認められた。1 段目平坦面は前方部側面の箇所へ近づくにつれて幅が狭くなっている。

後円部墳頂面までの 2 段目斜面は幅約 25m、高さ約 13m を測る。傾斜角度は約 31 度である。1 段目斜面に比べると等高線は多少弧状に屈曲している。等高線は所々に歪みが見られるが、全体的にスムーズにつながっている。

葺石は人頭大のものが、1 段目斜面を除いて、くびれ部全体に認められた。1 段目平坦面と 2 段目斜面からは比較的多くの円筒埴輪片が確認された。

なお、北側くびれ部の墳裾から後円部墳頂面までの幅は約 31～32m、高さは約 17.75m である。北側くびれ部の墳裾から墳頂最高所までの高さは約 18.5m である。北側くびれ部の墳裾から前方部平坦面が後円部へ取り付く地点までの幅は約 23m、高さは約 12.75m となる。南側くびれ部の様相と対比してみると、墳裾および 1 段目平坦面が標高の低い位置を巡る北側くびれ部は、1 段目および 2 段目斜面が相対的に幅広で高いつくりとなっている。

(百瀬香菜子・高橋浩二)

## 注

- (1) 山本昭治による報告(山本 1974)や斎藤優による報告書(斎藤 1979)所載の測量図にはこの落ち込みは示されていないが、福井大学考古学研究会による測量図(福井大学考古学研究会編 1978)には図示されている。

## 参考文献

近藤義郎 2000『前方後円墳観察への招待』青木書店

斎藤 優 1979『改訂松岡古墳群』松岡町教育委員会

福井大学考古学研究会編 1978『手繰ヶ城山古墳(松岡 3 号墳)の調査』Ⅱ、松岡町教育委員会・松岡古墳群を守る会

松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会 2005『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳 平成 13 年～平成 15 年度町内遺跡範囲確認調査報告書』

山本昭治 1974「手繰ヶ城山古墳について」『若越郷土研究』第 19 巻第 2 号